東方狩猟奇譚

河童の五色甲羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方狩猟奇譚

【Ｎコード】
Ｎ３３３６Ｓ

【作者名】
河童の五色甲羅

【あらすじ】
ひょんなことから幻想郷に迷い込んだ一人のハンター、そんな彼に待ち受けていたのは一癖も二癖もある幻想郷の住人達だった。話によるとこの幻想郷に見たこともない怪物が現れ始めたらしい。もしかしたら自分がいた世界のモンスター達までもが迷い込んできたのかもしれない。これはハンターとして見逃せない。こうして彼は幻想郷を舞台とした狩猟生活を始めたのであった――――――――――。　※不定期更新、グダグダ、独自設定、短文ｅｔｃ．．．が含まれますので苦手な方は戻るボタンを強く推奨します。

プロローグ　～唐突な幻想入り～（前書き）

初めまして、河童の五色甲羅と申します。
小説の方は初心者丸出しのものですが、精一杯に頑張る所存でございます。
あらすじにもありますが、この小説（？）は不定期更新、グダグダな内容、独自設定
その他諸々でやっていくのを今一度ご了承ください。
どうか生暖かい目で見てやってください。ではまたのちほど・・・

プロローグ　～唐突な幻想入り～

プロローグ
――――大地が、空が、海が、生物が、人々が、生きる力に満ち溢れた世界――――
この世界に生きる多種多様な《モンスター》
力と生命の象徴、恐怖と破壊の権化、天災と豊穣の化身・・・。
そんな彼らに人々は立ち向かうために、鉄を打ち、様々な武具を作った。
その武具を身に着け、人よりはるかに強大なモンスターに挑む者達がいた。
肉を切り裂く巨大な牙や、地面をえぐるほどに発達した爪、それらに臆することなく立ち向かう。
――――――――――狩るか、狩られるか――――――――――
彼らは人々の生活を潤し、様々な文化を産んだ。
人々はそんな彼らをこう呼んだ。
モンスターハンター、と――――――――――――――

――――ある日の夜、満月に照らされた渓流にある崖の上で大小二つの影が争っていた――――
「ハァ・・・ハァ・・・、そろそろだな」
この世界に住む若いハンターである彼はそう呟くと不敵に笑った。
『グウゥゥゥ・・・・』
対する大きな影は、低く唸り目の前の小さな影を睨んだ。
「これで・・・決まりだぁ！！」
ハンターは身の丈ほどある銀色に輝くハンマーを振りかざし、巨大

な影に猛然と喰ってかかった。
『ギャルゥアア！』
ハンマーは巨大な影の顔の左半分に当たり、その身から灼熱の炎を噴出した。辺りに血肉の焼ける臭いが充満する。
『ガアアアアアァァ！！』
すると巨大な影は苦し紛れに発達した前足を突き出し、ハンターを突き飛ばす。
思わぬ攻撃にハンターは防御する間もなく腹に手痛い一撃を喰らい吹き飛ばされてしまった。
「うっ！・・・・ゲホッ・・・」
腹を抱えてうずくまる、どうやらみぞおちに入ったらしい。
意識が朦朧とする中、自分に向かって走ってくる巨大な影になすすべなく、ここで力尽きるのかと思った矢先、
「ッ？！」
『ガウゥ？！』
ハンターの足場が崩れ、巨大な影もろとも真っ暗な崖下へと吸い込まれていった・・・
（畜生、不運のスキルでも発動してんのか！）
落ちてゆく最中、ハンターはこれまでの人生を振り返っていた。
（いろいろ苦労したけど、楽しかったな・・・。ユクモ村の皆ゴメン、ここまでみたいだ・・・）
故郷の村のことを思い出しながらハンターは意識を手放した――――――――――――――――――――――――
――（あら、死ぬ間際に失礼するけど、あなたはこっちの世界で仕事をしてもらうわ）――――
手放す最中、誰かの声が聞こえた。

――――――（ここはどこだろう？たしか俺は崖下に落ちて、それから・・・）

「ハッ！？・・・痛っ！」

寝起きから一気に目が覚めた感覚、そのすぐに来る全身に走る鈍痛、間違いない。

「生きてる？・・・はぁ、良かった」

あの崖から落ちたのに生きていることに感動しつつ、現状を確かめるためまだ自由のきかない体に力を入れる。

もしかしたら“あいつ”もこの場にいるかもしれないのだ。油断は禁物である。

一通り周りを見回すとある異変に気づいた。

今自分がいるこの場所はさっきの岩がごろごろ転がっていた渓流の崖ではない。

目に飛び込んでくるのは四方八方が鬱蒼とした木々で囲まれた森であった。

頭の中がハテナマークでいっぱいになりながらも今の自分の言葉を口に出した。

「ここ・・・・・何処？」

プロローグ　～唐突な幻想入り～（後書き）

え～いかがでしたか？しょっぱなから短文とグダグダが合わさってしまいましたが、
書く方の私は楽しかったですはい。
そしてこっから先の展開ですが・・・何も考えておりません。
またネタが浮かんだらちまちま書いていきます。
ハンターの外装等はのちほどにでも。
また機会があれば次回でお会いしましょう。

QUEST．1　～おいでませ、幻想郷～（前書き）

ども、河童の五色甲羅です。
とりあえず書いていたのが少量ですが溜まってきたので
投稿させていただきました。
では後書きで会いましょう。
※後書きの方が長くなっておりますのでご了承ください。

QUEST．1　～おいでませ、幻想郷～

――――あれからどれだけの時間が経ったのだろう。つい先ほどまではまだ満天の星空が頭の上を覆っていたと思っていたのに、いつの間にか太陽が東の空を照らしていた。
雲一つない青空に清々しさを感じながらいつの間にか眠ってしまっていた頭を起こした。
――――ああ、今日は良い天気になりそうだ。
「なんて現実逃避してる場合じゃないか」
虚しい独り言を呟きながら、俺は痛みがすっかり引いた体を起こし背伸びをした。
「さてと、これからどうしようか」
なにせ寝て起きても周りは見知らぬ森の中、方角もわからないようではどうしようもない。
もしかしたらまだ夢の中なのかもしれないなんて思っているほどだ。
しかし、そうも言ってられない。
このままこうしていても何も解決策が思い浮かばないのが現状だ。
「なにかなかったかな？」
そう言いつつ、腰に付けていたアイテムポーチの中を探る。
もしかしたらこの現状を解決できるアイテムがあるかもしれない。
そう淡い期待を持ちながら入っているアイテムを取り出していった。
「こんなものか・・・」
ポーチの中には、調合書、回復薬ａｎｄグレート、秘薬、砥石、ハチミツ、こんがり肉、こやし玉、肉焼きセット、生肉、角笛各種、などなど。
狩りの役には立ちそうだが、この現状を解決できそうにない。
それにしても、腰に付けても動きの邪魔にならないほどの大きさのポーチの中に、よくそんなに入っているものだ。
「確かあれが・・・あったはず・・・だけど・・・あ！あった！モ

ドリ玉！！」
ポーチの隅にあったモドリ玉を取り出し、高らかに掲げた。
「良し！これでベースキャンプまで戻ろう。こんな訳の分からない森、さっさと出よう」
そういって足元にモドリ玉を投げつけた。
その瞬間、玉の中から緑色の不思議な煙吹き出し、俺の体を包み込む。
「おお！！・・・・・・・・って・・・あ、あれ？」
しかし煙はそのまま何も起こさずに大気中に霧散していった。
「いつもならこのまま気づいたらベースキャンプにいたってなるはずなのに・・・」
どうやら事態は思っている以上に悪いみたいだ。
「はぁ・・・仕方がない。良策とは思えないが、歩いて森を出るしかないか・・・まあ、幸いアイテムポーチの中には薬も食糧もあるし、大丈夫でしょ。なんたって俺には頼もしい武器が・・・ん？」
さて、皆々様、時にこんな体験をしたことがおありだろうか。
“あるはずのものがない”・・・そう、いつもそばにあり、そしてあるのが当たり前の様になっているものが、いきなりなくなってしまい、どこを探しても見当たらない。
それが大切なものほど焦る気持ちは大きくなる。
「え？・・・あれ？・・・・嘘っ？！そ、そんな！！」
俺にしてみれば命の次ほどに大切なものがない状況、時に四面楚歌の狩場で共に戦ってくれて、時には命すら守ってくれる“もの”。
「ぶ・・・武器が・・・武器が無ええええエエエエエェェェ！！！」
朝になっても薄暗い森の中に、俺の悲痛な叫びが響き渡った――――――――

――――――「なんだ？いまの声？」
朝一番に森に魔法の研究用にとキノコを採りにきたのは良かったが、森の奥から悲痛な声が聞こえた。
「妖怪か？にしてもおかしいよな・・・」
森の奥から聞こえたのだ。こんな朝早くにこの森の中を探索するなんて私以外誰がいようか。
「幻聴か？やれやれ最近研究のために家に籠りっぱなしだったからな」
キノコを採り終わったら散歩にでも行くか、と思っていたら、
ガサッ
「？！」
音がした茂みの方に目をやると、森の奥からこちらに向かってくる人影を見つける。
「誰だ！」
スカートの中からミニ八卦炉を取り出し、人影に突き出すようにして構える。
「・・ッ・・・・・・うう・・・・」
呻き声とも泣き声とも聞こえる不気味な声の主は確実に近づいてくる。
（どうする？先制攻撃でもするか？）
「ん？・・・ああ！！」
どうやら向こうもこちらに気付いたようだ、走ってこちらに向かってくる。

「私にケンカを売ってくるなんざ、百万年早いんだぜ！」
そう言ってミニ八卦炉に魔力を注ぎ込む、それに答えるようにミニ八卦炉の中心から光が漏れ出る。
「喰らえ！！『マスタースパ「すいません！！助けてください！！」・・・え？」
飛び出してきたのは妖怪でも、妖獣でも、はたまた妖精でもない。妙ちくりんな赤い服を着ていて顔は出してはいるが茶色がかった髪で目を隠すようなヘアースタイルをしている、高身長の若い男だった。――――――――――――――――

――――――――ああ、困った、本当に困った！まさか武器を失くしてしまうなんて！武器が無ければハンター生活廃業も同然、武器を持っていないハンターなんてモンスターから見れば格好の標的じゃないか！
周りを探すにもどこを探しても見当たらない、ましてやあんな大きく目立つものが落ちていたら嫌でも目に入るものだ。
恐らくこの周辺にはまず落ちてはいないだろう。
「グスッ・・・・・・うう・・・・」
流れ出そうになる涙を堪える、とりあえずこの森を抜けよう。
武器はまた落ち着いてから探せばいい、そう心に言い聞かせながら俺は森の出口を目指して歩き始めた。すると、
「ん？・・・ああ！！」
向こうの方に人影が見えるではないか！俺はその人影に向かって走り出した。

近づくに連れてなにか光っているのが見えるが気にしない。
ひとまずその人影にかける言葉はもう決まっていた。
「喰らえ！！『マスタースパｒｙ「すいません！！助けてください！！」・・・え？」
必死になって言葉を投げかけた人物は、白と黒が印象的な服に黒く大きな三角帽子、金色で長い少々くせ毛の髪を持つ、見た目１０歳位の少女だった。
「「・・・・・・・・・・」」
二人の間に沈黙が走る。
危うく大人の男が少女に泣きつくところだったのだ・・・まずい何か言わないと、しかし先に沈黙を破ったのは少女の方だった。
「助けてくれだって？全く意味が分からないぜ」
訝しげに睨みつけてくる少女の手にはなにやらよくわからないものが光を出しながらこちらを向いている。
明らかにヤバイと、ハンター生活で培った危機管理能力が警報を鳴らす。
（下手なことは言わない方がいいな）
そう思った俺はひとまずここにいる経緯を話し、自分が今どこにいるのかを聞くことにした。
「いきなりですまないけれど、俺にもなにがなんだか・・・。崖から落ちて死んだと思ったらこの森にいて寝ても覚めてもこの状況で正直混乱してるんだ。厚かましいとは思うが、ここは一体ドコなのか知らないか？」
すると少女の持っているものから光が消えた、どうやらこちらに敵意はないと思ってくれたのだろう。内心ほっと胸を撫で下ろす。
「どうやら襲う気は無いみたいみたいだな。ここがドコだって？ここは“魔法の森”に決まってるぜ」
「マホウノモリ？」
はて、そんな名前の場所なんてあったっけ？きょとんとする俺に対し、少女は何かに気が付いたみたいだ。

「あーお前もしかして“外来人”か？」
「ガイライジン？」
何を言っているのかさっぱりわからない。
まずい、せっかく落ち着いてきた頭がまた混乱し始めた。
頭を抱えて唸り始める俺に少女はこう言った。
「そういや名前を聞いてなかったな」
「え？あ、ああ、俺は“モンスターハンター”だ。ハンターでいいよ」
「私は“霧雨魔理沙”、魔理沙でいいぜ。よろしくな」
そういってお互いの自己紹介をした。
そしたら目の前の小ｊ・・・もとい魔理沙はばつの悪そうな顔になり、
「なあ、ここがどこだか教えてやるぜ。今から言うことをちゃんと受け止めれるか？」
「ああ」
もはや驚くこともも無いだろう、そう踏んだ俺に対して魔理沙はこれまでの人生の中で最大ともいえる爆弾発言をした。
「ここは“幻想郷”、巫女が空を飛び、魑魅魍魎が夜の世界を我が物顔で跋扈する。お前のいた世界とは恐らく、“別の世界”だ」
――――――――――え？今なんて？ゲンソウキョウ？別世界？ああ、まだ俺は夢を見ているんだそうに違いない。そうであってほしい。
そう思いながら右頬を抓る。――――痛い。
「まあ、そうなるわな。ほら元気だせって！この魔理沙さんがちょっとの間だけ面倒見てやるからさ！」
カラカラと笑う魔理沙に対し、俺は頭を抱えて一言呟いた。
「どうしてこうなった・・・・」――――――――――――――――

QUEST．1　～おいでませ、幻想郷～（後書き）

読んで頂き、誠に感謝しております。
前回とは打って変わっていきなりの展開になっておりますが、本人が一番「ないな」と思っております。
さて、ハンターの外装等ですが、最初はやっぱりジンオウガ装備にしようかなと思っていたのですが、やっぱりハンターに個性を出さしてあげたいと思い、一番に思いついたネブラU装備になりました。
とりあえずこのハンターは上位に言っている設定にしているので亜種の方にしました。
え？ほかにマシなモンがあっただろうって？すいません、猛省しております・・・・・・
髪型についてはワイルドハートを採用、これは完璧私の趣ｍ（ｒｙ
（実は装備も趣味だったり・・・・・）
口調などはまだ安定していませんが、こんな感じで進めていきたいなと思っている所存でございます。
長々と書いてしまいましたがもし機会があればまたお会いしましょう。では。

QUEST．2　～受難の始まり～（前書き）

こんな時間に投稿します、河童の五色甲羅です。
今回は日別に書いているのでツギハギだらけの文章になっていると思います。。。
変な場所に句読点や、漢字間違い等ございましたら感想などで指摘してください。
では後書きでまた会いましょう。

QUEST．2　～受難の始まり～

――――――――――ちょっとここで待っててくれ。
つい先ほど知り合った少女、霧雨魔理沙にそう言われて今俺はそこらへんにあった切り株に腰を掛けて魔理沙の帰りを待っていた。
魔理沙が帰ってくるまでに俺は自分に降り注いだこの運命を受け入れようとするが、やはり信じがたいものがある。
いきなり別の世界にいると言われても信じれるほどの度量はない。
（幻想郷か・・・）
聞いたこともないところにきたものだ。
しかし、なぜ俺はここにきたのだろう。
崖から落ちたら別世界にいましたなんて見たことも聞いたこともない。
それにあの時聞こえた“あの声”。
ぼんやりとしか思い出せないが、何かを言っていたような気がする。
「う～んだめだ、思い出せない・・・」
「一体なにが思い出せないんだ？」
後ろから投げかけられた言葉に俺は振り向いた。
「用事は済んだのか？魔理沙」
「ああ、大量だぜ」
そう言って魔理沙は大量のキノコが入っている帽子を突き出してきた。
「用事ってこれのことか？そんなに沢山、なにに使うんだ？」
「いろいろなことに使うぜ」
「そうか」
いくらなんでも大雑把すぎるだろ、そう思ったが細かいところまでは気にしないのでそれ以上の言葉は言わなかった。
「それよりも落ち着いたか？」
「ああ、おかげさまで現在絶賛混乱中だ」

それは良かったと笑う魔理沙、こっちは非情な現実叩きつけられているというのにお気楽な奴だ。
だが今の自分にはその笑顔ほど頼もしいものはない。
すると魔理沙は釈然としない顔になり、こう言った。
「それにしてもどうしてお前はこの森の瘴気にやられないんだ？普通の人間だったら長時間ここにいたらこの瘴気には耐えられないはずだぜ？」
「生憎と体はかなり丈夫な方でね。だって俺ハンターだし」
今まで色々な毒の攻撃や有毒ガスが噴き出る火山を登ったりしたのだ、これくらいの瘴気だったら耐えられる。
「ふ～んそうか、じゃあ用事も済んだし、霊夢のとこにでも行くか」
そう言って魔理沙はキノコが詰まった帽子をかぶった・・・気持ち悪くないか、それ。
「ちょっと待ってくれ、俺を置いていく気か？」
「あーそうだったな。お前も来るか？」
「来るも何も、今の俺が頼れるのは君だけだぞ？それにそっちだって助けてやるって自分から言ってたじゃないか」
「そういやそんなことも言ったっけな、悪い悪い忘れてた」
「勘弁してくれよ・・・」
カラカラと笑う魔理沙に対し、俺は盛大に溜息を吐いた。
仮に冗談だったとしても心臓に悪い・・・もしかしたら素で忘れていたのかもしれない、それだけは本当に勘弁してほしい。
「良し！そうと決まればさっそく行くとするぜ！」
そう言うと魔理沙は気に立て掛けてあった箒を手に取りその上に跨った。・・・いやいやなにやってるんだ魔理沙は、また俺をからかっているのか？
「どうしたんだ？早く後ろに乗らないと置いてくぜ？」
「いや、さすがにそれはないわ・・・」
「なにいってんだ！いいから早く乗れって！」
催促されて渋々魔理沙の後のスペースに跨る。すると妙な浮遊感が

俺を襲った。
「ん？・・・って、うおおおお？！うっ浮いてる？！」
一体全体どうなっているんだ？！足元を見るとさっきまで立っていたはずの地面がどんどん遠くなっていくのが見える。
「まっ魔理沙！！これは一体？！」
「なんだ？空を飛ぶことがそんなに珍しいか？」
「当たり前だ！！」
「全く、これくらいのことでいちいち驚いていたら幻想郷じゃ生きていけないぜ？」
そんな会話をしている間にどんどん高度は上がっていく。
さっきまで俺達がいた森は眼下に広がり、その全貌を明らかにした。
どこまでも果てしなく続く森の海、もし魔理沙に出会わなかったら俺はこの森を抜け出すことは叶わず、運が悪ければ・・・。
そう思うとゾクリ、と背中になにか冷たいものを感じた。
「しっかり掴まってろよ？あと変なトコ触ったりでもしたらそこで落とすからな」
「え？ちょっ・・・ちょっと待って！」
「しゃべってると舌噛むぜ？」
「い、いや今すぐに降ろしt・・・うおおおおお？！！」
いきなり猛スピードで飛び出す箒に全身全霊でしがみ付く。
周りの景色がどんどん後ろに流れていくのが見える。
空を飛ぶってこんな感覚なのか？！
「“博霊神社”まで一っ飛びだぜ！！」
魔理沙がなにか言っているが耳の横を通り過ぎる突風のせいで何も聞こえない。
ああ、もしかしたら、いやもしかしなくても俺はとんでもない世界に迷い込んだのかもしれない。
これから自分を待ち受けていよう悲惨な運命に俺は涙が出そうにる。
（もう帰りたい・・・）
そんな心の呟きは誰の心にも届かず、雲一つない青空に消えていっ

た。――――――――――――――

――――――――――――――――――まさに青天の空ともいえる下、私は竹箒を持って参道を掃除していた。
こんな良い天気なんだからもしかしたら参拝客が来るかもしれない、巫女の勘がそう告げている。
参道が汚れていたりしたらせっかく来てもらったのに気分を害し回れ右されてしまうかもしれないのだ。そんなことにならない様、私はいつもより入念に竹箒を動かした。
「ふー、こんなもんでしょ」
額に滲んだ汗を拭いながらこんもりと積もった落ち葉に目をやる。
そういえば最後に掃除したのっていつだっけ・・・。
「まあいっか」
そんなことより燦燦（さんさん）と降り注ぐ太陽の下朝早くから掃除をしていたのだ、喉に渇きを覚える。お茶でも入れようと持っていた竹箒を賽銭箱に立て掛け、神社の裏手にある台所に向かった。
「ふぅ・・・」
賽銭箱の横に座り淹れたばかりのお茶で一服する。
頭の上には青空が広がりそよ風が頬を撫でる、何気ない、それでいてとても平和だと感じる時。
「それにしても良い天気ね・・・あら？」
雲一つない青空に一粒の黒い点が見えてくる。

かなりの速度でこちらに向かってきているようだ。
どんどん大きくなる点は近づくにつれてはっきりとしてくる。
「はぁ、また厄介ごとでも連れてきそうね」
平和なひと時もそこそこに、あともう少しでここにくるであろうものに私は溜息が出た――――――――

――――――――空を飛ぶスピードに慣れてきたらしく、先ほどまでより周りの風景がより鮮明に目の中に入ってくる。
この幻想郷と呼ばれている土地は四方が山々に囲まれていて、遥か彼方には雲を貫くほど高い山に広大な湖や集落のようなものも見えた。
「そろそろ着くぜ」
先程までとは違いはっきりと聞こえる魔理沙の声に反応し、前の方を見やる。
すると山奥に何か朱色のものが見えてきた。
あの特徴的な形は確か見覚えがある。
「あれは・・・鳥居か？もしかして目的地は神社か何かか？」
「さっき言ったはずだぜ？聞いてなかったのか？」
「突風がうるさくて何も聞こえなかったんだ」
鳥居の上を通り過ぎ参道の真ん中に降り立った。
俺はさっきまでいた青空を見上げた。
生まれて初めて空を飛んだが、もう味わいたくないものだ。

「よう、久しぶりだな、霊夢」
「最近見ないと思ったら、なにしに来たのよ？魔理沙」
会話が聞こえた方を見ると魔理沙が誰かと喋っている。
赤と白で彩られていてなぜか腋を出しているという独創的なデザインの巫女服らしきものを着ていて、頭に大きな赤いリボンを付けた魔理沙と同い年に見える少女だ。
少女は俺の方をちらとだけ見て魔理沙の方に向き直した。
「また変な厄介ごとでも拾ってきたの？」
「ああ、魔法の森で迷子になっていたらしいからここに連れてきたぜ」
「ここは迷子センターじゃないわよ」
知ってるぜと笑う魔理沙に対し少女は俺の方に質問してきた。
「あなた、名前は？」
「俺はモンスターハンター、ハンターでいい。君は？」
「私？私は“博霊霊夢”、ここ“博霊神社”の巫女よ。ところで、あなた見たところ外来人の様だけど、妙な格好してるわね」
「ああ、これは属に言う鎧ってやつだ。かっこいいだろ？」
そういって装備を披露する。しかし霊夢は冷たい目線で俺を見て、
「いやかっこいいはともかく変だと思っただけよ」
と吐き捨てた。遠慮なんて最初からないといわんばかりの率直な感想に少し傷付く。
（なんか素っ気ない子だな・・・）
魔理沙の明るく元気な態度とは違い、淡々としているというか、何色にも染まらないというか・・・そう思っていたら奥に賽銭箱が見えた。
せっかく神社に来たんだ、お参りの一つでもしておこう。
俺は賽銭箱の前に立ち元の世界のお金をいくらか中に投げ込み二拝二拍手一拝と行った。
願うことは勿論、
（早く元の世界に戻れますように）

参拝を終わらせ後ろを振り向くと霊夢が信じられないものを見たという表情をしていた。
「？どうかしｔ「もう、参拝客だったら早く言ってくれればいいのに！！あ、今お茶入れてくるから待っててねハンターさん！！」あ、ああ・・・」
さっきまでとは打って変わり、目が爛々と輝いた霊夢が俺に詰め寄り、早口で以上のことを言うとそそくさと神社の中に姿を消した。
「なんなんだ一体・・・」
「霊夢はいつもあんな感じだぜ」
「現金な奴なんだな・・・」
「ただの貧乏巫女だぜ」
賽銭を入れたら態度が急変するなんて巫女としてはどうかと思う。
それに俺が入れたのはこの世界のお金じゃなくじぶんの世界のお金だったんだが・・・当人は喜んでいるようだし、黙っておこう。
そうこうしている間に霊夢がお盆の上にお茶が入った湯呑みを乗せて戻ってきた。
「お待たせー、はいどうぞ！魔理沙のもあるわよ」
「ありがとう」「いただくぜ！」
渡された熱々のお茶を啜る、ほのかな苦みのあとにお茶の優しい香りが口の中に広がる。
どうやら霊夢はお茶を入れるのが得意みたいだ。
「ふぅ・・・美味いな」
「そう？ありがと」
ふふんと胸を張る巫女の微笑ましい姿にここにきて初めて笑みが浮かぶ。
「ねぇハンターさん、前の世界ではどんな事をしていたの？」
「おお！私も気になるぜ！！」
「そうかい？それじゃあ・・・」――――――――――――――――――――――――それから俺はもとの世界の事を話し始めた。

自分の故郷の村の話や仲間のハンターの事、いままでどんな場所に行ったり、そこでどんな狩りをしたかなどを読み聞かせるように話していった。
二人は時に驚いたり、笑ったりしながらまるで夢物語を聞く子どもの様に話を聞いてくれていた。
お返しにと二人はこの幻想郷について教えてくれた。
なんでも幻想郷は博霊大結界といわれる超巨大な結界で隔離された場所で、人と妖怪、妖精やはたまた神までもがこの結界の中で暮らしているという。
豊富な鉱石やモンスター等の素材を使って発展していった俺の世界の文化とは違い、ここは主に精神や魔法を中心とした独自の文化が発展していったとらしい。
またこの世界には“スペルカードルール”といわれる独特の決闘方法があるという。
安全とは言い切れないらしいが人と妖怪の間に問題が起こったとき、後に尾を引かない、恨みっこなしの平和的解決法らしい。
やってみたいと言ってみたが、どうやら少女たちが楽しむ為のものらしい。
ほかにもいろいろなことを二人は話してくれた。
どうやら俺はこの幻想郷の世界観にすっかり魅了されてしまったみたいだ。・・・だからこそ今はっきりさせたい、どうして俺がこの幻想郷に迷い込んだのか。
俺は二人にここにくるまでの経緯を意を決して話すことにした。この先、俺はここで何かをしなくてはならない、そんな気がしたのだ。
――

QUEST．2　～受難の始まり～（後書き）

※下の文章はあくまで私個人の視点から見たものですのであしからず。
なんかどんどん文章が長くなってきましたね・・・（・ω・；）
ここまで書いてきましたがＭＨの要素皆無ですよね。。。上げるとしたら次話くらいに少しだけ入ってくると思います、多分。
後ハンターの口調も安定していない。完結まで持っていけるのかこれ？
とりあえず目標は無事完結を目指し頑張っていきますのでこれからも流し読み程度で構いませんのでよろしくお願いします。
それではまた次回会いましょう。では。

QUEST．3　～再会～（前書き）

日が空いてしまいました、河童の五色甲羅です。
今回はちょいとばかし長いです。まあそこまでですが。
タイトル通りに今回、ハンターは感動？の再会を果たします。
また後書きの方でお会いしましょう。

QUEST. 3 ～再会～

――――――人里から妖怪の山へと帰るため、私はこの晴々とした空の下を何時もより遅めに空を飛んでいた。
今日は新聞を書く為に人里で話題になっている“ある事件”について人里の守護者に取材しにいった。
おかげで良い新聞が作れそうだ。
「でももう少しなにか欲しいかな」
誰に対して言った訳でもなく一人呟く。
確かにスクープではあるがこの幻想郷じゃそれくらいのことではだれの目にも止まらない。
この事件だけで新聞を作るのは少しボリュームに欠ける、そう思ったのだ。
「ん～何か面白そうなネタ、落ちてないかな・・・」
だから私はこうしてゆっくりと空を飛んでいる。
何時もみたいに飛んでいたらせっかくのネタを見逃してしまうからだ。
しかし、早々そんなものは見つからない。
「やっぱないかな～・・・あっそうだ！」
どうしたものかと考えているうちに良い考えが思いついた。
そういえばいるじゃないか、いつも茶ばかり飲んでいるネタになりそうな人物が。
「良し、そうと決まれば早速」
そういうと羽を大きく伸ばして“ある場所”に向かって一直線に飛び出す。
さっきまでのゆっくりとした飛び方とは打って変わり、常人には視野に捉えることができないほどに速く飛ぶ。
「あそこに行けば、何かあるかもしれないわね」
私はある場所・・・“博霊神社”に向かう。

風を切り、突風を周りに起こしながら一直線に飛んでゆく。
最早誰にも追いつけない速度で。なんたって私は“幻想郷最速”なのだから――――――――――――

――――――――――――「・・・以上がこの博霊神社までの経緯だ」
そう言って俺は長々と喋っていたので喉が渇いていたので湯呑みに残ったお茶を飲み干した。
「なるほどねぇ。崖から落ちて目が覚めたら魔法の森にいたなんて、とんだ災難だったわね。普通ならそんなとこにいたら死んでてもおかしくないもんね」
「自分事だけど、本当によく生きてたなと思うよ・・・魔理沙に拾われていなければ今頃まだあの森を彷徨っていそうだからな」
不幸中の幸いとはこのことをいうのだろう。
「私に助けられたこと、ちゃんと感謝しろよ？」
と魔理沙が笑う。しかし霊夢はそんな魔理沙に対し、
「ハッ、とんだおてんば娘に助けられたものね」
と鼻で笑った。すると魔理沙は明らかに不機嫌な声色で、
「あー、なんか言ったか？」
と言い霊夢を睨み付けた。それでも霊夢は平然としている。
「別に、ただハンターさんは大変ねと思っただけよ」
「そりゃどういう意味だぜ？」
「わからないの？鈍いわねー」

まずい、なんだこの空気。
さっきまでの空気とは違いかなり居心地が悪いんだが。
二人の言い争いはどんどん加速していく。
さすがにこれは止めた方が良いと判断した俺は二人の間に割って入る。
「霊夢、そんなに弾幕ごっこがしたいんなら受けて立つぜ」
「あら、負けて泣いても知らないわよ？」
「ちょっと待った！二人ともいい加減にしないか」
その言葉に対して魔理沙はふてくされた顔になる。
「だってよハンター、霊夢が・・・」
「確かに今のは霊夢が悪いと思う、だけど売り言葉に買い言葉の対応をした魔理沙も悪いんだぞ」
「うっ・・・そりゃそうだけど・・・」
「ふん、いい気味ね」
「霊夢、君も魔理沙に対してひどいんじゃないか？確かに魔理沙は少々活発な子だけれど、そのおかげで俺は助かったんだ。そういう言い方はやめてくれないか」
「むぅ・・・」
魔理沙と霊夢は押し黙ってしまった。
反発せずに受け入れてくれているのだから根はいい子達なんだと思う。
だからこそ仲良くして欲しい。
そんな年頃の娘を持った父親みたいな感覚になりながら二人を見据える。
「はぁ・・・なんか調子狂うぜ・・・」「そうね・・・」
「喧嘩両成敗、二人とも反省しなさい」
「「は～い」」
どうやら喧嘩になるのを止めることに成功したみたいだ。
俺としても仲間同士の喧嘩なんて見たくもない。
俺が言うのも何だが、無駄な争いはしない方なんだ・・・まあ、例

外もあるが。
「それよりハンターさん、これからどうするの？」
「うん？そうだな・・・いわれてみれば考えてなかったな」
「なんか行ってみたい所はないのか？」
「う～ん・・・ん？なんだあれ？」
何処に行こうか思案しているとなにかこっちに飛んで来るのが見えた。って速い？！
「どうも～霊夢さん・・・って誰ですかあなた？」
黒いセミロングの髪の上に頭襟と見えるものを付けていて、白いブラウスにミニスカート、足には高下駄みたいなものを履いている。極めつけに背中に黒い羽を生やした少女が目の前の参道に降り立った。
「あっ？え？」
困惑する俺。
仕方がない、さっきまで遠い空にいた筈の人物？がもうすぐ目の前にいるのだ。
瞬間移動でもしたのかという速さでここに来たとでもいうのか？
すると霊夢がまた面倒くさい奴が来たとぶつぶつ言いながら少女に向かって歩いていく。
「今日は何の用なのブン屋」
「あやや、そんな言い方ないんじゃないですか？それより誰ですあなた」
「相手の名前を聞く時はまず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」
魔理沙がそういうとそれもそうですねと俺に向かい合って自己紹介を始めた。
「どうも私（わたくし）、文々。新聞を書いております“射命丸文（しゃめいまるあや）”と申します以後宜しく」
「あっ、ああ、ヨロシク・・・」
「・・・で？あなたは？」

「え？ああすまない、俺はモンスターハンターだ」
「ハンターさんですね。見たところあなた・・・外来人ですね！これは大スクープの予感、早速取材させていただきます！！まず何処から来たのですか？ここまでの経緯は？前の場所では何をしていたのですか？年齢は？好きな食べ物は？好みの女性は？さあさあ早くゲロってくださいますかねぇ！！」
「え？い、いやちょっと？！」
軽い挨拶を終えるといきなり目の色を変えていつの間にか出したメモ帳とペンを片手に俺を質問攻めにしてきた。
初対面なのにここまで言い寄るか普通。ものすごい勢いに思わずたじろぐ。
「やめなさい」バシッ「あたっ、何するんですか霊夢さん！」
見かねた霊夢が射命丸の頭をお祓い棒で叩く。
結構痛いらしい、頭を押さえて涙目になっている。
「助かった・・・ありがとう霊夢」
「別にうるさかったからやっただけよ」
「あややや、ただ取材してただけなのに」
「取材ってあの質問攻めの事か？全くとんでもない奴だぜ」
「魔理沙さんまで？！ああ、真実を報道するにはやはり障害が多いものなんですね・・・」
トンチンカンなことを言いつつ嘘くさい泣きまねをしながら地面に崩れる射命丸。
そこだけなぜかスポットライトが当たったみたいになる。
どういう原理だ？
「なんだ、取材がしたかったのなら別に俺はいいぞ？」
「！本当ですか！？」
がばっと体を起こして詰め寄って来る。それにしてもころころ感情が変わる子だな。
「ああ、俺みたいな奴で良ければ。でもさっきみたいな質問攻めはやめてくれよ？」

「わかってますとも！では早速・・・」
「あーあ、知らないぜ？あることないこと書かれても」
「本当に大変ね、ハンターさん」
「失敬な！！私の新聞はそこら辺のゴシップ記事とは違い、常に真実を書いてます！」
「あはは・・・」
やり取りに苦笑しながらも取材と面した質問攻めを俺は答えていった。──────────

────────「ご協力、ありがとうございました！」
「・・・そりゃどうも・・・・・」
良い笑顔でこちらに敬礼する射命丸に対し俺は疲弊していた。
当たり前だ、あんなに喋らされたんだから。
「いやぁーおかげで良いネタが入りましたよ！」
そんな俺に気遣いの一つも無く射命丸はネタ帳片手に小躍りしている。
こんなことになるんだったら断っていた方が良かったのかもしれない。
「あら終わったの？」
「えらく時間が掛かったな」
二人は二人して止めようともせずにのんびりお茶を啜っていた。
「だから言ったんだぜ？そうなることがわかっていたから止めてや

ったのに」
「・・・今度からは注意するよ」
全く魔理沙の言う通りだった。
後悔の波が心に押し寄せてくる。
「かれこれどれ位話してたのかしら。もうお昼時よ」
霊夢がそう言って上を見る。
俺も上を見てみると確かに真上に太陽がある。
すると魔理沙がワザとらしく腹を触りながらこう言った。
「あー朝っぱらから何も食べていないんだぜー腹が減ったぜー」
「ご生憎様、なんにもないわよ」
「つまんないぜー」
そんな会話に耳を傾けたらグゥ、と腹が鳴った。
無理も無い俺なんか昨日の夜から何も食べていないんだ。
「仕方ない、3人共、これ喰うか？」
そう言ってポーチの中からこんがり肉を取り出し、三人に一個ずつ渡していく。
「一体何なんだぜ？これ」
「これはこんがり肉って言ってな、ハンター達の腹を満たしてくれるんだ。
これを忘れて狩場に行くと皆から初歩的なミスですねと言われるから気を付けろよ」
「いや私達ハンターじゃありませんし・・・」
「何の肉かもわからないんじゃさすがの私も口付けるのは無理ね」
「一理あるぜ」
「だぁーもう！うだうだ言うのはやめていいから喰ってみろって！！」
俺の言葉に三人は渋々こんがり肉を食べ始める。
すると初めは嫌そうな顔だったが一口、また一口と食べるに連れて、
「あ、おいしい」「なかなかいけるぜ、これ」「こんなの初めて食べましたよ」

と次々に賛美の言葉を投げかけた。
「当たり前だ、なにせ俺が焼いたんだからな」
そう言って俺は自分のこんがり肉に齧り付く、パリッとした外側に対し内側は肉汁が溢れ出てくるほどジューシーに焼き上がっていた。
うん、うまい。
「「「「ご馳走様でした」」」」
「ふぅ、結構ボリュームあったな」
「ホントね、お肉でお腹一杯になるのは何時振りかしら」
「俺みたいなハンターが喰うモンだからな、ちょっと量が多かったかな」
「そうね、喉が渇いたから水でも飲んでくるわ」
「ああ、私の分も頼むぜ」
「自分で飲みに来なさい」
そういって二人は神社の中に入っていった。
「じゃあ、私はそろそろ原稿を書く為に帰りますね」
横にいた射命丸が立ち上がりながら言った。
そして羽を広げて空中に浮かんだ。
「そうか、じゃあまたな」
「はい、では――――――あっそうそう」
そういって飛び立とうとして急にこちらに向いた。
「そういえばハンターさん、これからどうするんです？どこか行く宛でもあるんですか？」
「いやないよ。さてどうしたものか・・・」
「じゃあ少し気になることが」
そういって射命丸は神妙な顔になり、
「最近、人里の周辺で奇妙な事件が相次いでいましてね。被害にあった里人は口を揃えてこう言うんです」
「・・・・・」
さっきまでの雰囲気とは違って重々しい空気に変わる。
「見たことも無い奇妙な奴らに襲われた、と」

「それを俺に言ってどうするんだ？」
「いやぁ、もしかしたらハンターさんに精通するものがあるかと思いまして。もし良かったら行ってみてはいかがです？」
「どうせ行く場所なんて決まっていないんだ。まずはその人里やらにでも行くか」
それにその事件、なにか引っ掛かる。もしかしたら・・・
「あと私からの忠告ですけどね」
射命丸は口を扇で隠しながら呟いた。

「幻想郷を歩く際は用心しなさい。あなたの体、血の匂いしかしないわよ」

低く冷たい声で言い放つ。
それから何も言わずに射命丸は青空の彼方に飛び去りすぐに見えなくなった。
「・・・」
「お～い・・・ってあれ？ハンターだけか？」
「・・・」
「おい、無視はさすがに酷いんじゃないか？」
「ん？あ、ああ魔理沙か。いやちょっとな・・・」
「？」
・・・面と向かって言われてみると確かにそうかのかもしれないな。

仕方ないと言ってしまえばそれまでだが、やはり何かくるものがある。
「あら、ハンターさんだけ？」
どうやら霊夢も戻ってきたみたいだ。
「丁度良かった、二人とも俺はとりあえず人里に向かうことにするよ」
「人里だって？悪いけどそこに行くなら私は着いていかないぜ」
「え？なんで？」「乙女の秘密だぜ！」「はぁ・・・」
どうやら魔理沙は人里に行くのが嫌みたいだ。
仕方ないと霊夢の方を見て、
「霊夢」「嫌よメンドクサイ」「即答！？」
望みは簡単に打ち砕かれた。悩みを聞いてくれるんじゃなかったのか。
「はぁ・・・わかったよ一人で行くよ」
「一人で大丈夫？昼だからといっても危険よ」
「だよなぁ・・・なんか頼りないぜ」
そういうんだったら案内してくれよ。
内心そう思いながらもあることを思い出した。
「う～んせめてあれがあればな・・・」
そう、今の俺には武器がない。
射命丸の言葉も気にかかるし、せめて刀かなにか欲しいところだ。
「そうだ霊夢、あそこに行かないか？」
「あそこ？・・・！そうね、丁度お茶とお菓子が切れたところだったし」
二人は何処かに行くみたいだ。
「どこに行くんだ？」
「ハンターも来るか？もしかしたら探し物が見つかるかもしれないぞ」
「そうだなぁ・・・」
「早くしてよ。先に行くわよ？」

「わかった。魔理沙、俺も連れて行ってくれ」
「じゃあ乗りな！」
俺は魔理沙の後ろに飛び乗る。
「で、結局どこに行くんだ？」
俺の疑問に魔理沙は笑いながら答えた。
「偏屈な店主がやっている古道具屋さ」
そういって箒は俺を乗せたまま飛び立ち、森の方へと飛んで行った。
――――――――――――――――――――

――――――魔法の森の入り口にある様々な道具を扱う店、“香霖堂”。ここの主人である僕は店の奥のカウンターでいつも通り読書を楽しんでいた――――――――――――
「はずなんだけど・・・」
今日は雲一つない青空に見舞われたので久しぶりに外に置いてある道具の整理でもしようかと僕は外に出ていた。
あらかた片づけが済んだので店の中に戻ろうとした時にふと屋根を見ると何かが刺さっていた。
「一体あれはなんだい？」
結構深く刺さっているのか知らないが柄の部分しかここからでは確認できない。
なにかの武器に見えるが・・・とにかくあれを取り除かなければい

けない。
「やれやれ」
僕は梯子を取り出し屋根に立て掛けた。
いざ登ろうとすると、
「ん？誰だい？」
後ろの森から何かの気配を感じた。
振り向いて辺りを確認する。
しかしなにもいないようだ。
「ふむ、妖精かなにかでもいたのかな？」
別段気にすることなく梯子に足を掛ける、すると
「おーい、こうりーん」
「こんにちは、霖之助さん」
随分聞き慣れた声がした。
声のした方に目をやると僕の店には不吉な白黒魔女と紅白巫女がいた。
「やあ魔理沙に霊夢、今日はどうしたんだい？」
「私はお茶を貰いに」「私はミニ八卦炉のメンテナンスを依頼しにきたぜ」
「はぁ・・・もちろんお金を払ってくれるんだろうね」
「「ツケで」」
「またかい？君達、ツケを払う気は無いのかい・・・あれ？」
何時ものやり取りをしていると魔理沙の後ろに誰か乗っている。
赤い服を着た男の様だ。
「君は・・・」
僕の言葉に反応したのか男は僕の前に降り立った。――――――

――――――――「ここが香霖堂か。あんたが店主さんかい？」
達筆な文字で香霖堂とでかでかと書かれた色々なものが散乱している店かどうかもわからない家の前で作業をしていた男性に声を掛ける。
すると男性はお辞儀をしながら自己紹介をしてきた。
「申し遅れました。私はここ、香霖堂の店主である“森近霖之助”と申します。以後お見知りおきを」
魔理沙と霊夢は変なものでも食ったのか言わんばかりの顔をしているが、気せずに答える。
「ご丁寧にどうも、俺はモンスターハンターだ。ハンターでいい」
「ではハンター殿、今日は何をお求めで？」
なにかここに来てから敬語で話されるのに慣れていないからかむず痒い気がする。
「そんなに畏まらないでタメ口でいいよ」
「そうかい？じゃあそうさせてもらうよ。ハンター」
「あ、ああそうしてくれ。霖之助」
急に変わる口調に若干戸惑いながらも霖之助と名乗る人物を見やる。
太陽の陽ざしに照らされて鈍く光る銀色で一本だけ跳ね返った癖毛が特徴的なやや短めの髪型をしている。
服装は青と黒のツートンカラーの服を着ていて見ただけではかなり複雑そうな服だ。
顔立ちは良く、下だけ黒い縁がついた楕円形の眼鏡を掛けていて首には黒いチョーカーを付けている。
年齢は俺とそう変わらなそうだ。

「どうしたんだい？人の顔をじっと見たりなんかして」
「いや、別に。若いのに屋号持ちかと思うとすごいなと思って」
「少なくとも君よりはかなり年上だと思うよ？」
「え？」
かなり年上だって？
「僕は“人間と妖怪のハーフ”だからね」
「あーなるほど・・」
「見た目だけじゃ何歳かもわからない奴ばかりだよ幻想郷(ここ)は」
気を付けたまえと霖之助は言った。
「それにしても可笑しな服装だね、やっぱり君は外来人かい？」
「なぁ、前々から思ってたんだけどなんなんだそのガイライジンって」
「大雑把にいえば幻想郷の外の世界から来た人々の事を指すね」
「へー、そーなのかー」
「挨拶は終わったか？」
ほったらかしにされていたのが不満だったらしく、魔理沙はこちらをジト目で見ていた。
「ああ、終わったよ」
「そうか、なら良いんだ。でもよ香霖、今日は珍しく外にいたんだな」
「人を引き籠りみたいに言わないでくれ。今日は天気が良いから店の外の整理をしていたんだよ」
あっ、やっぱりここ店なんだ。
傍から見ればガラクタの山にしか見えないんだが。
「ふ～んじゃあ、なんで屋根に上ろうとしていたんだ？」
「ああ、実は屋根の上に何か刺さっていてね・・・」
屋根を見ると確かになんか盛大に刺さっている・・・うん？はて、どこかで見たことがあるような・・・
「なあ霖之助、あれが刺さったのは何時頃だ？」
「いや、少なくとも昨日まではあんなの無かったよ。多分今日の朝

方にでも刺さったんじゃないかな」
あれが何かという確信に近づいていく。
もしかしたら・・・
「・・・なあ俺が取ってきてもいいか？」
「え？別に構わないが・・・」
俺は梯子を登り屋根の上に上がった。
そして刺さっている何かを見る。
「――――――――！！！」
どうやら俺の目に間違いはなかったみたいだ。
弾かれた様に柄の部分を掴み、そして思いっ切り引っ張り出した。
引き出されたものは太陽の光を受け神々しい銀色の輝きを放つ、巨大なハンマーだった。
そしてそれは俺が失くしていたハンターにとって大切な――――――――！
「俺の“星砕きプロメテオル”！！！」
ああ、やっと見つけた。
もう手放したりするもんか。
良かった本当に見つかって良かった！テンションが上がりに上がった俺は勢い良く屋根から飛び降りた。そして綺麗に地面に着地する。
「なんかよくわからないけど、良かったわねハンターさん」
「それを探していたのか？なんか物騒そうなもんだなー」
「まさかこんなに早く見つかってくれるなんて、ありがとう二人とも！！」
元を辿れば二人のおかげで見つかったのだ、俺は霊夢と魔理沙ににお礼を言う。
すると後ろからはなにか冷たいものを感じた。
「・・・それは君の所有物なのかい？ハンター」
「ああ、霖之す・・・け？」
笑っているように見えるが笑っていない、特に目が。
「じゃあ後始末は君にやってもらおうか」

霖之助は親指を屋根の上を示す。
こんなのが刺さっていたのを無理やり力任せに引き抜いたものなのだから当然屋根にはぽっかりと大きな穴が開いていた。
霖之助はこちらに近づきにっこりと笑って肩を叩いて今の状態では逆に怖い優しい声で、
「よろしく頼むよ」
と一言いって工具箱を手渡してきた。俺は言い訳できるはずもなく、
「・・・はい・・・」
と呟いた。すると霖之助は俺の手からハンマーを奪い去り、
「君が途中で逃げない為にこれは貰っておくよ」
「えぇ？！ちょっと待ってくれ！」
「大丈夫、終わったら返してあげるよ・・・随分重たいんだな、これ」
そう言って霖之助は店の中に消えた。
手放したりしないなんて今しがた思っていたのに・・・なんだか無性に悲しくなった。
「そうだ霊夢に魔理沙、二人とも手伝ってくれ」
「頑張れハンターさん」「ファイトだぜ」
そう言って二人も店の中に消えた。
ひゅうと一陣の風が俺に吹き抜ける。
今度は泣きたくなった。
「はぁ・・・早く終わらそう・・・」
そういって適当な木材と工具箱を手に俺は自分の武器が開けた穴を塞ぎにかかった。――――――――――

QUEST．3　～再会～（後書き）

いくらなんでも唐突すぎんだろこれ。読み返してそう思いました。
さてハンターに武器が戻ってきたわけですが、次回からちょっとしたバトルっぽいものが始まります。もしかしたら残酷描写になるかもしれませんのでよろしくお願いします。ではまた次回、さようなら。

QUEST．４　～幻想郷のならず者～（前書き）

（#友）＜お前の小説読みにくい！）
と、友人に怒られました。河童の五色甲羅です。
という訳で今回、今までとは違う文章の書き方にチャレンジしました。
もし前の方が良かったり、もっとここをこうしたら良いなどのアドバイスが欲しいので良かったら皆様の感想をお聞かせください。
文章のテスト回ってことで今回は短めです。

QUEST．４　～幻想郷のならず者～

――――――――「よいしょ・・・と」
先ほどハンターから奪・・・もとい受け取ったハンマーを鑑定台に立て掛ける。
しかしこのハンマー、見た目以上にかなり重たい。
「一体ナニでできているんだろうか・・・」
“異世界の道具”、それだけでも霖之助の興味を引き付けるのに十分だった。
この香霖堂には様々な道具が所狭しと並んでいる。
人間の道具、妖怪の道具、外の世界の道具、更には冥界の道具や魔界の道具まで存在する。
しかし見たことも聞いたこともない世界の物はほとんどない。
「実に興味深いな」
「なに一人でニヤニヤしてんだ？香霖」
ドアの方を見ると魔理沙と霊夢が入ってきた。
「別に笑っていないよ」
「いいえ、随分楽しそうだったわ」
「むぅ・・・」
そこまで顔に出ていたか？そんなことを思っていたら魔理沙がハンマーを興味津々に見つめていた。
「どうしたんだい魔理沙？」
「いや、やっぱり気になるモンだぜ」
「確かに気になるわね。ハンターさんは確か星ナントカって言ってたけれど」
「香霖ちょっと見てみたらどうだ」
「仕方ないな、ちょっと待ってくれ」
そうは言ってはいるが、内心霖之助もかなり気になっている。
「どれどれ・・・」

そう言ってハンマーに意識を集中させる。
すると霖之助の持つ能力、“未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力”が発動する。
名の通りどんな物でも見ただけで対象の名前が分かり、その名前を口にすると使い方がわかるという能力だ。
一見万能に見えるが欠点があり、あくまでも名前と用途だけであり肝心の使い方はさっぱりわからない。
霖之助自身は別段気にしていないようだが。
霖之助はハンマーから伝わってくる名前を口に出した。
「名称は星砕きプロメテオル、用途は叩くだね」
名前の割には随分とあっけらかんとした用途だった。
「叩くぅ？そんだけか？」
「生憎それだけだよ」
「ふ～ん、所詮はトンカチってところね」
「なんだよ、つまんないぜ」
魔理沙は面白くないのかハンマーを指で突く。
「魔理沙あまり触ると怒られるぞ？」
「バレなきゃ大丈夫だぜ・・・ん？」
魔理沙は何か気になったのかハンマーの頭部をじっと見つめた。
「なあこれ、よく見るとなんか顔に見えないか？」
「そういえばそうね。何か不気味な感じ」
「ふむ、いいところに気が付いたね」
ハンマーに手を置いて霖之助は喋り始めた。
「僕が思うにこれは何かの祭の為に使われる祭具じゃないかなと思う」
「祭具って神社なんかにあるあれのことか？」
「そう、魔理沙の言った通りこのハンマーの頭部は何かの顔を表している。そしてこの顔こそがこの祭具を使って行われる祭りの象徴である神なんじゃないかな」
「へぇ、でも変な顔の神様ね」

「別に人の形を成した神だけじゃないだろ？この顔から連想するに、恐らく彼の世界の神は“龍”の形をしていたと推測できる」
「龍だって？この幻想郷でも早々お目に掛からないぜ」
「龍神様の事かい魔理沙？でも龍神様とこの龍には決定的な違いがある」
ここで霊夢はそこらにあった椅子に腰を掛け、魔理沙は壺の上に座った。
霖之助も鑑定台の椅子に座り再び話し始めた。
「本来龍が操る天候は雨と風だ。しかしこの龍が操るのは星と炎なんだ」
「星と炎？なんか私とかぶるぜ」
「根拠はあるの？霖之助さん」
「あるさ、名前がそれだよ霊夢。星砕きプロメテオル、星砕きとはそのままの通り星を砕き夜空を作ったのだと予想することができる。」
「星を砕くなんて、随分豪快な龍ね」
「多分彼の世界の夜は大きな星が一つだけしか浮かんでいなかったんだろう、あまりに殺風景だからそれに見かねたこの龍は星を砕き、数多の欠片にして夜空に満天の星空を作り出したんだろうね」
「随分ロマンチックな龍だな。でもどうやってバラバラにしたんだ？」
「そこでプロメテオルという名が関わってくる。最後に付くルを外すとプロメテオ、この言葉は火の精を表す。天まで焦がす勢いの炎を出して星を砕いたという訳だ。最初に戻るがこの龍の操るものは星と炎の二つ。この二つが関係しているものはなんだと思う？」
霖之助の問いかけに霊夢はすぐに分かったらしい、ポンと手を叩いて答えを言った。
「お日様ね！じゃあこの龍は太陽の化身ってことかしら」
「その通り、さすがは霊夢だね」
「じゃあご褒美にお茶貰っていくわね」

「いやちょっと待て」
「じゃあ私も何か貰っていくぜ！！」
「君は何もしていないだろう魔理沙！」
霖之助が言い終わる前に二人は店の奥に消えた。
「まだ話し終わっていないんだが・・・全くしょうがないな・・・」
そう言って霖之助は椅子に深く座り直し、近場にあった本を手に取る。
「龍か、一度は見てみたいものだな」
そう呟いたその時、
「――――――――っ？！」
なにか大勢に睨み付けられる嫌な感覚が全身を襲った。
辺りを見渡してもそんな視線を送れるものなんてない。
「もしかして・・・」
鑑定台に立て掛けられたハンマーを見る。
しかしそこには物言わぬ顔があるだけだった。
しかしその静寂に満ちた顔でこちらを見る目がひどく恐ろしくも思えた。
「気のせい・・・か」
「霖之助さん！！」「香霖！！」
奥に行っていた筈の二人が血相を変えてこっちに寄ってくる。
「今嫌な感じが店の周りから感じたわ、なにかあったの？」
「霊夢も感じたのかい？じゃあ気のせいじゃなさそうだな」
「ちょっと香霖堂の周辺でも見てくるぜ」
「待って魔理沙」
魔理沙は扉の方へ歩いていく、すると霊夢が魔理沙を引き止めた。
「なんだよ霊夢」
「今外に出ない方がいいわ」
「はぁ？なに言ってんだ」
「わたしにもわからないの、ただ出ない方がいいとだけしか」
「魔理沙ここは霊夢の言う通りにしよう」

霖之助がそう言うと魔理沙は扉から離れた。
「でもどうすんだ？なんだか居心地が悪いぜ。たくさんの目に監視されてるみたいで」
「確かに心地良いからはかけ離れているね」
「なんか獲物にでもなってる気分ね」
そう言っているうちに外の方が騒がしくなってきた。
誰かが何かと戦っているような音も聞こえ始める。
一体誰が・・・
「あっ！！」
魔理沙が短く声を上げる。
「大変だ！外にはハンターがいるんだった！！」
「っ！しまった！！」
「大変！忘れていたわ！！」
外の音は十中八九ハンターが何かと戦っている音だろう。
三人は扉を乱暴に開けて外へと飛び出した。――――――――――

――――――――――時間を少し戻して今現在ハンターは屋根に盛大に開いた穴を修理しているところだ。
「しっかし見事な大穴だな」
穴に板を被せてトンカチで釘を打っていく。
「屋根の修復なんて何時振りだろうな」
以前の記憶には確か嵐がユクモ村を襲った際に村人全員で剥がれた屋根や瓦礫なんかを掃除したのを覚えている。
「はぁ…無事に帰れるのか俺」
溜息を吐きながらも作業の手は休めない。
「後はここを打って・・・っと、良し完成！」
先程まで開いていた大穴はハンターの手によって無事に塞がれた。
「うん、我ながらいい出来じゃないか」
まだ瓦が敷かれていないのでボロく見えてしまうが、そこまでやれとは言われていない。
本当はやってもよかったのだが使えそうな瓦がなかったのでひとまずここで終了とする。
「さて降りるか」
そう言って屋根から直接飛び降りる。
普通の人がやったら足が折れる高さだがハンターには関係ない、とある地方のハンターは断崖絶壁から遥か下の地面に着地しても何とも無かったというくらいだ。
「おーい終わった・・・ぞ」
扉に付いたドアノブに手を掛けた途端、何か大勢に見られている感覚がハンターを襲った。
「・・・・なんだ？」
後ろを振り向き視線を感じる森の茂みを睨み付ける。
すると森の中を走る影が見えた。
影ハンターと香霖堂を囲む様に左右に広がっていく。
ハンターは周りを警戒しつつ、足元にあった石ころを手に持ち、

「誰だが知らんが出て来い！」
思いっ切り茂みに投げつけた。
「・・・・・・・」
一瞬の静寂が辺りを包み込む。
（・・・・・・・・・・・来るっ！）
ハンターは身構えた途端、茂みから一斉に影が飛び出してきた。
『ギャアッ！　ギャアッ！』
「？！お、お前らは！！」
飛び出してきたのはハンターがよく知っているものだった。
ハンターであれば必ず対峙するであろう奴らの名前は――――――
「“ジャギィ”だと？なんでこんな場所に・・・」
『ギャア！』
「来るか、おらァ！！」
『ギャッ！・・・』
一匹のジャギィが爪を立ててハンターに飛びかかる。
しかしハンターはその爪が届かぬ内に飛びかかってきたジャギィの腹部を思いっ切り殴りつける。
内臓が潰れる感覚が拳に伝わり、殴られたジャギィはそのまま地面に崩れて動かなくなった。
『！』
いきなり仲間がやられたのに警戒したのかハンターの周りを囲むように回り始める。
ハンターは指を鳴らしてジャギィ達を見渡した。
（数は…5匹か。ハンマーが無いけどいけるか？…）
『ギャア！！　ギャア！！』
「うおおっ危ねっ！」
一匹のジャギィが鳴いた途端、一斉にハンターに飛びかかってきた。
ハンターはすかさず前転して攻撃を避ける。
「調子に乗るなよ！」
そして近くにいたジャギィの首を掴み力任せに飛びかかってきたジ

ャギィ達に投げ飛ばした。
『ガァ！』『ギャアァ？！』『ゲェェェ・・・』
何匹かを巻き込みながら吹っ飛んでいく。
今投げ飛ばしたジャギィは息絶えたに違いない、首の骨が外れているのが見てわかる。
『ガアァ！』
「甘い！」
『プギャ！・・・』
背後から一匹のジャギィが襲ってくるが、素早く反応したハンターの裏拳が顎にクリーンヒットした。
『ギャアギャア！！』
仲間が殺されて激怒したのか他より少し大柄なジャギィがハンター目掛けて走り出す。
「お前がこいつらのリーダーだな！」
ハンターも走ってくるジャギィ目掛けて走り出す。
『ガルァッ！！』
ジャギィは大きく口を開けてハンターに噛み付いた。
「痛っ…だが捕らえた！」
ハンターはすかさずジャギィの首に腕を回し、そのまま締め上げる。
『ガアアァ・・・！』
息が苦しくなったジャギィは腕から逃れようと暴れる。
しかしハンターのスリーパーはガッチリと決まっていた。
『ギ・・・ゲェェ・・・・・』
しだいに暴れる力が弱くなっていき、やがて泡を吹きながらジャギィは落ちた。
「ふぅ、さてお前らはどうする？」
ハンターが目線を送った先には、先ほど投げたジャギィに巻き込まれて生きていた奴らがいた。
『キュルル・・・』
しかしリーダーを落とされた彼らは完全に戦意を失っていた。

『ギャア！ギャア！』
一匹のジャギィが鳴くと蜘蛛の子を散らすように森の奥へと逃げて行った。
「待ちやがれ！」
ハンターが追いかけようとした時、
「ハンター！！」
香霖堂の扉が乱暴に開いて中から三人が出てきた。
「！！これは一体・・・」
「おいハンター、一体なにがあったんだ？こいつらは何者だ？」
魔理沙が地面に横たわっているジャギィの死体を指さしながらいった。
「さっきまでこいつらが襲ってきていたんだ」
「見たことも無い生き物だな・・・」
「そうね、多分幻想郷の者ではないわ」
「こいつらの名前はジャギィ、俺の世界のモンスターだ」
ハンターが言った言葉に三人は驚いた。
「じゃあこいつらは君と同じ世界からやって来たとでも言うのかい？」
「恐らく、そういうことみたいだな」
「ねぇ、動かないみたいだけど死んじゃってるの？」
霊夢の問いかけにハンターは溜息を吐きながら言った。
「ああ、襲い掛かってきたからな」
「襲ってきただけで殺したのか？とんでもない奴だな」
魔理沙の言葉が癪に触ったのかハンターは少し大きな声で言う。
「当たり前だ、殺さなければ逆に殺されていたんだからな」
強い物言いに魔理沙はたじろぐ。見かねた霖之助が間に割って入った。
「落ち着てくれハンター、それより何があったか僕らに説明してくれないかい？」
「はっ・・・すまない魔理沙、頭に血が登ってて・・・」

「い、いや・・・こっちこそゴメンな」
霖之助の冷静な言葉にハンターは落ち着きを取り戻したので、なにがあったのかを説明した。――――――

QUEST．４　～幻想郷のならず者～（後書き）

えーいかがでしたでしょうか？
最初の部分は霖之助さんが薀蓄を語るのを書きたかっただけです。
・・・霖之助さんが好きなだけですはい。
まだまだ東方要素が強くてＭＨ要素が弱いですね・・・精進します。
。。
またバトルっぽいところ、ちょっとハンターが強いんじゃないかなと思いますが、あんなでかいハンマー振り回していている腕力ならジャギィくらいなら殴り殺せそうですから大丈夫ですよね。ね？
ではまた次回で会いましょうサヨナラ。

QUEST．5　～香霖堂襲撃事件～（前書き）

ゴールデンウィーク、皆様はどうお過ごしですか？河童の五色甲羅です。
どんどん日が開いていく更新に自分のことながら不甲斐無いと感じる今日この頃、いや最近忙しかったもので・・・別に言い訳じゃアリマセンヨ？
今回はタイトル見れば大体予想できる内容のはずです。
ではまた後程。

QUEST. 5　～香霖堂襲撃事件～

――――――――――あれからハンターは外にあったジャギィ達の死体を片づけ、今は香霖堂内にある長椅子に腰掛けている。
つい先ほど今あったことを霊夢、魔理沙、霖之助に説明し終わったところだ。
「そうか、それは大変だったな」
そう言って霖之助はハンターにお茶を差し出す。
「お、サンキュー」
受け取ったお茶を啜りながらハンターは外で起こった襲撃事件を思い返していた。
（問題は何故あいつらがこの場所にいるかだ・・・。あの時に俺と一緒に落ちた？いや、それはない。あの時あの場所にいたのは俺と“奴”だけだったはず・・・）
「おい、大丈夫か？顔色悪いぜ？」
魔理沙が心配そうにハンターの顔を覗き込む。
「いや、なんで俺の世界のモンスターがいるんだと思って」
「モンスターねぇ、なんだか思っていたのと違うな」
魔理沙はなぜか残念そうだ。
「一体どんな想像してたんだ？」
「なんかこう、ドッカーンってなってる奴やシュパパーンみたいな奴」
「なんだそら」
魔理沙のあっけらかんとした答えに肩透かしを喰らう。
すると霊夢が呆れたように溜息を吐いた。
「それよりどうするのよ？さっきの奴らがまたやって来ないって断言できないんでしょ？」
「確かにそう言われればそうだな、どうするんだい？ハンター」
三人の視線がハンターに集まる。

「な・・・何？皆して俺を見て」
「当たり前だろ！あいつらの事を知ってんのはお前だけなんだから！」
「しっかりしなさいよ全く！」
「なにもそこまで言わなくても・・・」
罵声を浴びながらハンターはお世辞にも良くない頭を回転させた。
「そうだな・・・ああっと！」
「どうしたんだい？」
何かを思い出したハンターの素振りに霖之助が問い掛ける。
「まずは武器を返してくれ、屋根は直したんだからいいだろ？それが無きゃ始まらない」
「ああ、そうだったね。ほらそこに立て掛けてある」
鑑定台に立て掛けてあったハンマーをハンターは方手に取り、後ろ腰に据え付けた。
「ああ・・・この腰に感じる重み・・・やっぱこれがなきゃ始まらないな」
そう言ってハンターは何ともいえない笑顔を浮かべる。
「ハンター・・・気持ち悪いぜ」
「悪かったな！！」
「驚いたな、あの重さのハンマーを片手で振り上げるとは・・・」
「ハンターさんって本当に人間？実は鬼の血が入ってたりして」
「ふん、どうせ俺は筋肉バカですよー」
どうでもいいやり取りをしながらハンターは今後の作戦を三人に話し始めた。
「まず、ジャギィ達は間違いなくここに戻ってくるだろう」
ハンターの一言にその場に緊張が走る。
「それにあいつらと戦っている時に感じたが、恐らく奴らはすでにそれなりの規模の集団になっているな」
「じゃあどうするんだ？何か奴らに対抗できるモンはないのか？」
魔理沙の質問にハンターは答える。が、

「奴らは火が苦手なんだ。だから松明があれば寄っては来ないと思うけど・・・」
「思うけど・・・なんなんだぜ？」
歯切れの悪い言い方になっていき、ハンターの顔が曇る。
「どうした、具合でも悪いのかい？」
「・・・さっきも言った通り、奴らは集団で行動し、一種の社会性を持ったモンスターなんだ」
「で、それがどうかしたの？」
「集団で行動するものには必ずリーダーがいる、さすがにそいつは松明ごときにビビるようなことはない」
「そのリーダーって？」
魔理沙がハンターに聞こうとした時、
『・・・・・・・・オオ・・・・・・・ン』
「！！」
ハンターが弾かれた様に窓の外を見る。
すると森の中に無数の蠢く影が見えた。
「しまった！まさかこんなに早く来るなんて！」
「まさか奴らが？！」
「ああ、今度は半端じゃない数だ！」
そういってハンターはドアを開いて外に出た。
「っ！」
そこで広がっていた光景にハンターは息を呑む。
『ギャア！ギャア！』『クルルル・・・』『ギャオギャオ！』
見渡す限りのジャギィの群雲が広がっていた。
「ハンター・・・げっ！なんだこりゃあ？」
魔理沙がハンターの後ろから外を見て驚愕している。
「中に戻ってろ魔理沙、ここは俺一人で十分だ」
「はぁ？！いくらなんでも一人じゃ無理だろ！助太刀するぜ！！」
「えぇ？！」
魔理沙の思いがけない言動にハンターの顔が歪む。

「そうね、幻想郷の先輩としてここの厳しさを教えてあげないとね」
「って霊夢までなに言ってんだ！？」
「ハンター、すまないがこの子達のワガママを聞いてやってくれ」
「霖之助、お前もか！」
言い争っている内にしびれを切らしたのかジャギィ達が飛び掛かってくる。
『ガアアァ！！』
「っ！しまった！！」
「遅いぜ！！」
しかしいち早く反応した魔理沙は飛び掛かってきたジャギィ達に星の形をした弾幕を浴びせた。
ジャギィ達は色とりどりの弾幕に次々と当たっては吹っ飛んでいく。
「うお？！これが話に聞いた“弾幕ごっこ”って奴か！」
「へへっ、ざっとこんなもんだぜ『グウゥゥ・・・・・』ってあれ？」
しかし吹っ飛ばされたジャギィ達は起き上がりこちらを睨みつけてくる。
「ちょっと魔理沙、手加減してんじゃないわよ！」
霊夢がそう言うと魔理沙は首を振って否定する。
「手加減なんてしてないぜ！」
「あいつらはちょっと切ったり叩いたりしたぐらいじゃ駄目なんだ」
そういってハンターが一歩前に出る。
するとジャギィ達が親の敵と言わんばかりに騒ぎ出した。
あまりのうるささに霊夢と魔理沙が耳を塞ぐ。
「な、なんだぁ？！」
「いきなりなんなの？！」
「なにって俺がハンターだからだろ」
しかしこの騒ぎに臆することなくハンターはジャギィ達に近づいていく。
「さぁ、どっからでもかかってきな、武器がありゃこっちのモンだ

！」
『ギュアアッ！！』
ハンターの挑発にジャギィ達は一斉に襲いかかってきた。
ハンターは素早くハンマーを腰から外し、その勢いで思い切り振り上げた。
「おぉらあぁぁ！！」
『ギャッ・・・！』『ガアア！・・・』
振り上げに巻き込まれたジャギィ達はまるで木の葉の様に宙を舞い、そのまま地面に叩きつけられた。
「さて、次はどいつだ？」
ハンターはジャギィ達を睨み付けながらドスン、とハンマーで地面を叩く。
するとハンマーがまるで生きているかのように躍動しながら炎が噴き出し始める。
『！！グウウゥ・・・・・』
ジャギィ達は今の一撃を警戒して後退りを始める。
「来ないんだったら・・・こっちから行くぞ！」
そういってハンターはジャギィ達に突っ込んでいく。
負けじとジャギィもハンターに食って掛かるが、
「フンッ！！」
『ギャアアア！』
ハンマーはジャギィに当たる度にその身から炎を噴き出し、次から次へとジャギィ達をその炎で焼き払っていく。
打撃のダメージと炎の火傷によってジャギィの屍が瞬く間に辺りに散乱していった。
「す・・・すげ・・・」
あまりのハンターによる猛攻に魔理沙は感嘆している。
「こんだけやってもリーダーはまだ出てこないか・・・」
「なぁ、ハンター、だからリーダーってなんなんだよ！？」
魔理沙が大声でハンターに食って掛かる。

「そういや言ってなかったな。こいつらの親玉は・・・」
ハンターが口を開いた瞬間、
『クオオオォォォォォォン』
「？！」
「おっとおでましか」
森の中からなにか遠吠えのような声が聞こえた。
なにかが森から走ってくる。
『クルルル・・・』
するとジャギィ達は騒ぐのをやめた。
茂みから飛び出してきたのはジャギィよりも何倍も大きな体が飛び出してきた。
『ガアアァァァッ！』
「なんだあれ！？」
「ジャギィ達を統率し、その声で様々な命令を下す“狗竜・ドスジャギィ”だ」
そういってハンターは体制を低くしてハンマーを構える。
「っ！！これは一体・・・」
若干空気と化していた霖之助が声を漏らす。
「どうしたの霖之助さん？」
「名前は星砕きプロメテオル、用途は――――――――っ」
言い切る前に言葉を飲み込む。
（そんな・・・“用途が変わった”？！）
先程まで霖之助の目に映っていた用途は叩くだけのシンプルなものだったのが、今見ていると変わっているのだ。
本来道具は作られる時にその使命を貰い、それが用途として現れるのだがこのように用途が変わるものは探したって早々に見つかるような代物ではない。
霖之助はもう一度ハンターが握っているものを見る。
――――名称：星砕きプロメテオル　用途：太陽が落ちてきたかのような一撃でモンスターを狩る――――――

やはり用途が変わっている。
（まさか特定の人物が持つと用途が変わる仕組みなのか？）
『ギュアアッ！』
「霖之助さん危ない！！」
そう言って霊夢が御札を飛ばす。
「え？ってうわっ！」
御札はがいつの間にか霖之助に接近していた一匹のジャギィに当たって爆発した。
霊夢が助けてくれなくてはやられていただろう。
「大丈夫か香霖？！」
魔理沙が霖之助に駆け寄って安否を確認する。
どうやら無事なようだ。
「ああ、問題ない。霊夢ありがとう」
「ぼやっとするな霖之助！」
ハンターの方を向くと、今まさにドスジャギィとハンターが互に激しく争い合っているところだった。
「そらっ！！」
『ギャウゥッ！』
横に振ったハンマーがドスジャギィの右足に当たり大きく身体が傾く。
チャンスと言わんばかりにハンターがドスジャギィの頭目掛けてハンマーを振り上げる。が、
「くそっ・・・周りが邪魔だ・・・」
ハンターの周りをジャギィが囲み攻撃の邪魔をする。
『クオオォォォォン』
それに対しドスジャギィは巧みにジャギィを操りじわじわとハンターを追い詰めていく。
数の暴力でドスジャギィの方が有利なようだ。
「せめて一対一ならこいつ位どうってこと・・・」
「一対一ならいいんだな？」

「え？」
後ろからいきなり話しかけられて変な声が出る。
声の主の魔理沙がミニ八卦炉を取出し、ジャギィの群れに標準を合わせる。
「恋符『マスタースパーク』」
魔理沙が呟くとミニ八卦炉から極太のレーザーが発射された。
「うを？？！」
眩しい光に思わず目を瞑る。
「なにが起こって・・・っ！？」
しばらくしてから目を開けると飛び込んできたのはジャギィ達の焼け焦げた死体の山。
『？！』
残ったドスジャギィとジャギィ達はなにがあったのかわからないようで混乱している。
「通常弾幕は無理でもスペルカードだったら効くみたいだな」
そういって魔理沙がミニ八卦炉をまた構える。
『・・・・クオックオックオックオッ』
ドスジャギィが連続で短く鳴くとジャギィ達が森の中へ消えていく。
それに続いてドスジャギィもハンターに背を向けて森の中に入っていった。
「逃げる気か？！」
「待つんだハンター！」
ハンターが追い掛けようとすると霖之助が腕を掴んで征する。
そうこうしている内にジャギィの群れは既に森に消えて影さえ見えなくなった。
「ちっ・・・なんで止めたんだ！」
ハンターが霖之助を睨み付ける。
「抑えてくれ、今から魔法の森に入るのはそれこそ自殺行為だ」
空を見ると太陽は西へ傾き、綺麗な夕陽となって空を茜色に染め上げていた。

「じきに夜になる。夜の幻想郷は危険だ」
「・・・・・わかった」
霖之助の言う通り、ここはハンターがいた世界とは違い何が起こるかまだわからない。
そう思いハンターは追いかけるのをやめてハンマーをしまう。
すると噴き出していた炎がゆっくりと消えていく。
その光景に霖之助はなにか考える素振りを見せている。
「ん？どうした、これが気になるのか？」
ハンターがその視線の先にあるハンマーを指さす。
まぁねと霖之助は首を縦に振り肯定を示した。
そしてなにかを思いついたみたいにハンターを見る。
「そうだハンターちょっとした提案なんだが」
「なんだ？」
「その武器を一晩貸してくれないかい？」
「いやちょっと待て」
あまりにもいきなりな物言いにハンターは身構える。
「別にただで貸せとは言わないよ。君は今日幻想郷に来たばっかりで泊まる所もないんだろう？だから今夜は香霖堂に泊まるといい。その代わりにちょっとその武器を調べさせて欲しいんだ」
悪くないだろう提案だろう？と霖之助は言う。
「う～んそうだな・・・」
確かにハンターにとっては破格の条件である。
考える素振りを見せながらもハンターの答えはすでに出ていた。
「・・・・・壊すなよ？」
「別に分解するわけではないよ」
そういってハンターは香霖堂に泊まることにした。
しかしこの提案に二人が乱入してきた。
「ハンターここに泊まるのか？じゃ香霖私も今日は泊まるぜ」
「じゃあ私も」
「そんなに寝る場所は家にはないよ」

「いいじゃねえか一緒に寝れば」
「そうよね、じゃあ晩御飯でも作ろうかしら」
そう言って霊夢はそそくさと香霖堂内に入っていく。
「手伝うぜ霊夢」
魔理沙も霊夢と同じく香霖堂内に入っていった。
「全くあの子達は人の意見を無視して・・・」
わざとらしく溜息を吐く霖之助だがそこまで嫌がっているようではなさそうだ。
「はは、随分懐かれているんだな」
「まぁあの子達とは長い付き合いだからね」
「どれくらい長いんだ？」
「そうだね・・・魔理沙とは生まれた時から面倒を見ていたからね」
霖之助は茜色に染まっている空を見上げて話し続ける。
「僕はここ、香霖堂を開く前に人里にある大手の道具店で修業していたんだ。名前は霧雨道具店、魔理沙の実家だよ」
「へぇ、魔理沙はいいとこの御嬢さんなのか」
「いろいろあって今は絶縁しているみたいだけどね、全く親子揃って素直じゃないんだから」
「そうだったのか・・・なんだか悪い気がするな・・・」
「そんなに気に病むことはないよハンター」
あの明るい笑顔の裏にそんな暗い過去があったなんてハンターは知る由もなかった。
ひゅう、と風が吹き、森の木々がざわめく。
「風が出てきたな、ここらを早く片づけて僕らも中に入ろう」
「あ、ああ・・・」
そう言ってハンターと霖之助はジャギィの死体で死屍累々となった周りを片づけ始めた。――――――――――――――――

――――――――――――――――片づけをする二人の遥か上空に一つの人影があった。
「どこに行ったかと思ったらここにいたなんてね」
そっと呟くように人影は口を開く。
「さて、どれ位の力量があるか今から楽しみね」
そう言って口元を釣り上げる。
「せいぜい死なないように頑張ってね？モンスターハンターさん？」
言い終わると人影の後ろの空間が裂けた。
裂けた中にはいくつもの目があったが人影はその中に躊躇することなく入っていく。
人影が入ると裂けた空間が閉じていき、そして完璧に閉じると跡形もなく消えた。――――――――――

QUEST．5　～香霖堂襲撃事件～（後書き）

今回も内容が薄っぺらい感が凄まじいことになってますね。
その割にはかなり悩みましたがとりあえず自分的にはまとまったと思っています。
書き方はこっちの方がやり易いので以後こちらの書き方を優先して使っていきます。
俺、これを投稿し終えたら狩りに行くんだ・・・。
ではまた次回で会いましょうサヨナラ。

QUEST．6　～束の間の休息？～（前書き）

まず初めにすいませんでした。河童の五色甲羅です。
まさかここまで日が開いてしまうとは思いもしませんでした。
いつの間にか一週間以上もログインすらしなかったもので・・・
時が経つのは早いものですね・・・・・（遠い目）
正直この頃いろんなことがありまして、まず新作の東方神霊廟の発売決定でしょ？モンハンはアイルー村Ｇの公式発表でしょ？正直時の荒波に呑まれそうで怖いです。
でもこれからも最後まで書くと決めたので頑張っていきたいと思います。
ではまた後ほど。

QUEST．6　～束の間の休息？～

――――――――――「ふぅー、こんなもんでいいか」
先ほどあった襲撃事件の後片付けを終えたハンターが額に滲んだ汗を腕で拭きながら言った。
すると反対側の後片付けを終えた霖之助が話しかけてきた。

「こっちは終わったよハンター、そっちはどうだい？」
「ああ、こっちも丁度終わったところだ」

ハンターは手に付いた土を払いながら立ち上がる。
二人がした後片付けは埋葬といういたってシンプルな形で執り行われた。
しかし軽く二十匹近くはいただろうか、穴を掘って一匹ずつ埋めていくだけでもかなりの労力と時間を伴った。
若干荒い気がするが、ハンターにとって普段なら死体は放置で済ましていたのでこれだけでも十分だろう。

「しかしドスジャギィまでもがこの世界に来ていたなんてな・・・」
「先程の親玉かい？なかなか礼儀知らずな子だったね」
「あいつらに礼儀もへったくれもあるかよ」

ジャギィだけならハンターと同じく迷い込んだとでも考えられるが、危機管理能力が高いドスジャギィまでもが幻想郷にいるのがわかった。
ハンターに嫌な予感が走る。
（もしかしたらほかの大型モンスターも・・・・・いやいや偶然だ

ろう）
首を振って今の考えを拭う。
ドスジャギィならまだ普通の人でも追い払える可能性があるが、元の世界にはハンター四人がかりでも狩れないような凶悪なモンスターもいる。
もしそんなのが幻想郷にいたりしたらもっと大事になっているはずだ。

「どうかしたかい？」
「ん？ああいや別に、後ここの木材を使っていいか？」
「別に構わないよ」

霖之助の了承を得てハンターは香霖堂の端に置いてある木材を数本拝借し、テキパキと組み合わせていく。
そして簡易の松明を二つ作り、入り口の両側に取り付けた。

「良し、こんなもんか」

そう言ってハンターは松明に火を灯した。
火は大きく燃え盛り、辺りを明るく照らしていく。

「これでいいだろ」
「すまないねハンター、そこまでやってくれて」
「いいってことよ、こうしておけばジャギィ達も近づかないだろう」

そう言ってハンターは大きく背伸びをした。

「あー、疲れた。なんたって今日ここに来ただけで屋根の修理にジャギィ達とドンパチやった後にその後片付けもしたからな」
「お疲れ様、そろそろ中に入ろうか。夕飯もそろそろ出来上がる頃

だろう」
霖之助が良い終わった直ぐに香霖堂の入り口の扉が開き、中から霊夢が現れた。
「二人ともお夕飯出来たわよ～」
「よっしゃー！」
待っていましたと言わんばかりにハンターは香霖堂の中へと飛び込んでいった。
そんなハンターを見て霖之助は溜息を吐く。
「やれやれ、子供みたいだな」
「あら、霖之助さんも人の事言えないんじゃない？」
「失敬な、僕は夕飯くらいであんなに浮かれたりしないよ」
「どうだか、それより早く食べましょ？」
「そうだね、元より僕は食事しなくてもいいんだが・・・たまにはいいだろう」
そう言って二人も香霖堂の中へと入っていった。
太陽はすっかり地平線に沈み、煌々と輝く月の光が幻想郷を照らしている。
人家には明かりが灯り、屋台や飲み屋が忙しくなる時間帯である。
魔法の森の入り口にあるここ香霖堂からも中から賑やかな声が聞こえていた。
「もーらい！」
「あっ！魔理沙それは俺のおかずだぞ！返せ！！」
「借りてくぜ！」

「返すつもりなんて最初っから無いだろ！」
「・・・二人とも食事中は静かにしないか」
「もぐもぐ・・・うるさいわね～静かにできない訳？むしゃむしゃ・・・」
「霊夢、口の中にものを入れて喋らない」

今現在ハンターは魔理沙と霊夢が作ってくれた晩飯を霖之助を含めた四人で香霖堂の奥にある生活スペースと思われる場所にあるちゃぶ台を囲んでいた。
ハンマーは食事の邪魔になるので店の鑑定台に立て掛けてある。
霊夢と魔理沙の二人が作ってくれたのは白米と味噌汁と焼き魚と御新香といった簡素な食事だった。
二人曰く台所に食材が無かったらしい。

「しかしうまいな～この料理」

そう言ってハンターは豆腐が入った味噌汁を啜る。
すると霊夢がハンターに問い掛けた。

「それはなによりね、そういえばハンターさんって家事とかできるの？」
「うっ」

味噌汁を持ったまま手が固まる。
霊夢の素朴な疑問に思わず言葉に詰まるハンター。
若干冷や汗をかきながら小さな声で呟いた。

「いや・・・ちょ・・・ちょっとは・・・でき・・・る・・・かな？・・・うん」
「できないのね」

「できないみたいだな」
「できないようだね」

三人は同じ言葉をそれぞれの口からハンターにぶつける。
それに耐え兼ねたハンターは傍から聞いたら言い訳でしかない話をし始めた。

「いやだって俺の仕事ってかなりハードだし家の事にも手が回らないって言うか・・・そもそも家事全般は後輩のハンターとかアイルー達にまかせっきりだったし」
「押し付けてたって訳か」
「違うって！俺だってやろうと思えばやれんだぞ？ただやる気が起こらないだけの話であって」
「もういいよハンター、聞き苦しい」
「そんな冷たい言葉をいわないでくれ！俺は体は丈夫だが心はガラスの様に繊細なんだ！！」
「はいはいさっさと食べてくれないといつまで経っても洗い物が終わらないわ。それともやってくれるのかしら？家事のできるハンターさん？」
「・・・すんませんでした」

すっかり萎縮してしまったハンターはおかずを魔理沙に盗られた晩飯をぼそぼそと食べる。
あれこれ言われた後だったのであまり味がわからない。

「子供じゃないんだからそんなに不貞腐れないでくれ」
「・・・別に不貞腐れてなんかない」――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――食事が終わり、お茶を啜っていた魔理沙と霊夢は霖之助に言う。
「なぁ香霖、風呂でも焚いてくれよ」
「あ、私も入りたい」
「じゃあ焚いてくるからすこし待っててくれ」
「「は～い」」

そう言って霖之助は居間を出ていった。

「風呂か～、そういやあれから全く入って無かったな」

ハンターが独り言を呟いて目を閉じる。
瞼の裏に故郷のユクモ村の風景が浮かぶ。
ユクモ村は温泉で有名な村で毎年温泉客で賑わっている村だ。
聞いた話では海を越えた大陸にある大きな街の大長老が湯治にやって来られたとか。
故郷を思ったらますますハンターは今の自分の状況が悲しくなってくる。
思えば今日一日で不思議な事がたくさん起こったものだ。
崖から落ちて死んだと覚悟したのに目を開けたら森の中にいて、そこで魔理沙に助けてもらってここが全く違う世界の幻想郷だと知った時は絶望しかなかった。

でもなんとかここのルールを霊夢に教えて貰い、射命丸に取材と称した問答を食らい、霖之助に一日だが泊まる場所を与えてもらった。世界が変わっても人の温もりは変わらないんだなと似合わない言葉が浮かぶ。

「どうしたハンター、眠いのか？」
「いや、ちょっと感傷的になってただけだ」
「なんか似合わないわね」
「俺も丁度そう思ってたんだ」
「随分楽しそうだね」

他愛もない話をしていると居間の襖が開いて霖之助が入ってきた。

「さて誰から入るんだい？」
「俺は後でいい結構汚れているからな」
「じゃあお先に失礼するぜ」
「待って魔理沙私も行く」
「ん～」

そう言って霊夢と魔理沙は一緒に居間を出ていく。
すると霖之助も居間から出ていく。

「ん？どこ行くんだ？」
「ああ、今から君のハンマーを調べようと思ってね」
「じゃあ俺も行こう、知ってる奴が近くにいた方が安全だからな」

二人は居間から出てハンマーがある店内まで行く。
立て掛けてあったハンマーを鑑定台の上に置くと霖之助は椅子に座り失礼するよと一言言うとハンマーを調べ始める。

「わかっちゃいると思うが頭部には触れるなよ？下手に衝撃を与えたりすると火を噴くぞ」
「わかっているさ、自ら火傷を負うような真似はしないよ」
それを機に霖之助は全く喋らなくなった。
時折何かを考えるような素振りをしているところを見ると、完全に自分の思考に没頭しているようだ。
店内に静寂が流れる。
時折奥の方から水音がする位で何とも言えない空気になる。

（・・・暇だな）

話す相手がいなくなったので途端に暇になったハンターは店の中をぐるりと見渡す。
棚に所狭しと置かれた見たことも無い道具の数々、足も踏み場もないくらいに置かれた壺や大きな箱のような物。
はっきり言ってお世辞にも店とは言えないような内装である。

（ん？なんだあの剣）

物に埋もれた店内に大事そうに置かれた剣に目を奪われる。
見た目はなんの変哲もないただの剣に見えるが、なにか不可視の力を感じる不思議な剣だ。
ハンターは何気無しにその剣に触れようとしたその時、
「勝手に触らないでくれないか？」
「っ？！なんだお前か・・・いきなり喋らないでくれよ驚くだろ？」
今までハンマーを調べるのに没頭していた筈の霖之助がいつの間にかハンターの後ろに立っていた。

「いやなんかこの剣が気になってな」
「・・・・・別に普通の剣だよ」
なにか含みのある言い方を残して元の椅子に座る。
ハンターも近くにあった椅子に腰掛ける。
「普通の剣ねぇ・・・それにしてみればなかなか大事そうにしてるじゃないか」
ハンターは店内に置かれた物を見渡した後にまた剣を見た。
霖之助はバツの悪そうな顔をしているが、その顔は正にハンターが言った事を証明していることとなっている。
「見ただけで分かるものなのかい？」
「まぁな、武器を見りゃどれほどのものくらいはわかるさ」
「ほう、余程自身があるみたいだね」
「なんたってモンスターハンターだからな！」
全く持って意味が分からない事なのにハンターは自慢げに鼻を鳴らすと霖之助はポカンと口を開けた後何だそれはと苦笑した。
その苦笑に釣られてハンターも笑い出した。
「それよりもういいのか？」
「うん？何がだい？」
しばらく笑い合った後にハンターは霖之助の前にあるハンマーを指さした。
「調べ終えたのか？」
「ああ、中々興味深かったよ」

霖之助は満足そうに椅子の背もたれに体重を掛ける。

「調べた結果・・・・・・・・なにもわからないことが分かったよ」

ガタタッ！！

あまりに素っ頓狂な答えが返ってきてハンターは思わず椅子から滑り落ちた。

「いやはやここまで素晴らしい技術を持って作られているとは思いもしなかったよ」

「は、はぁ」

「やはり僕が思うにこのハンマーはやはり云々・・・・・」

どうやらこの霖之助という男は自分の知識や物事の解釈を他人に聞いてもらうのが好きらしい。

根拠も理論性もへったくれもない薀蓄が霖之助の口から次々と飛び出す。

それは正に言葉の弾幕。

ハンターは長い話（興味のない）は結構苦手だったので話題を変えようとしたが、趣味人の霖之助の耳にハンターの言葉は全く届いていなかった。

結局霊夢と魔理沙が風呂から上がるまでハンターは延々と聞く気も無い霖之助の薀蓄の聞く羽目になってしまった。――――――――――――――――

「はぁ、ようやく自由になれた・・・」

先程まで霖之助の蘊蓄を延々と聞かされていたハンターの顔は若干疲労している。
それに比べて霖之助の顔はイキイキと輝いていた。
魔理沙と霊夢が変わってくれなかったら最悪そのまま朝を迎える所だったのかもしれない。
なにかよくわからない理不尽な気分になりながらも今ハンターは脱衣所で鎧を外していた。

「よいしょ・・・ここに置いとくか」

鎧を外して脱衣所の隅に置く。
続いてインナーを脱いでいくとハンターの身体が露わになった。
ボディビルダーのようなガチガチの筋肉質という訳でもないが、やはり一般成人男性を遥かに上回る筋肉が付いた体である。
付き方もバランスが取れていて無駄がない付き方である。
しかしそんなハンターの体には傷の跡が至る所にありどれ程の修羅場を掻い潜ってきたのかを物語っていた。
その中でもの胸から腹にかけてある大きな痣がハンターの目に止まった。

「この傷は？・・・！そうか“あの時”の・・・」

おおきな痣に手を当てる。
するとあの夜の事を思い出した。
月が綺麗だったあの日の渓流の崖が鮮明に頭の中に浮かぶ。
そして、“あいつ”の姿も。

「痛っ！」

あいつの事を思っていたら急に痣が痛くなった。
ズキズキと鈍い痛みを耐えていると次第に痛みは引いていった。

「なんだったんだ？・・・まぁいいかそれよりも風呂だ風呂」

湯船に入る前にまずは体に掛け湯をする。
少々熱い湯が体に付いた砂ぼこりや返り血をを流していく。
続いて湯船に足から肩までゆっくりと浸かっていくと思わずハンターの口から溜息が漏れた。

「はぁ～・・・」
（いい湯だ・・・・・）

今日一日の疲れが湯に溶けて消えていく感覚に酔いしれる。
なにも考えずにただ湯に浸かっているだけでここまで幸せな気分になるのは何故だろうか。

「やっぱり風呂はいいなぁ、人が産み出した文化の極みだな」

ハンターはそう言うと目を瞑って鼻歌を歌い始めた。

「ははははは～ん♪たらららら～んらららら～ら～♪」
どこかで聞いたことのある旋律を鼻歌で歌っていく。
ハンターは束の間の休息を楽しんでいるようである。

風呂場と打って変わってこちらは居間、霊夢、魔理沙、霖之助の三人が宴会の準備をしていた。

「随分ご機嫌だなハンターの奴」
「まぁいいんじゃないの？今日は疲れただろうから」

霊夢と魔理沙はそう言って風呂上がりに何処からか持ってきた酒を煽る。

「また勝手に人の酒を開けて・・・」

霖之助が苦い顔をして二人を見る。
そんな視線にお構いなしに魔理沙は止める事無く酒を注いでは呑んでいる。
しかしそんな中霊夢が酒瓶を置いて真剣な表情になる。

「ねぇ、知ってる？今人里で奇怪な事が起こっていること」
「「奇怪な事？」」

魔理沙と霖之助は頭の上にハテナマークが出る。
そんな様子に霊夢は溜息を付きながら説明し始めた。

「一週間前ぐらいかしら？人里の周りで見たことも無い奴に襲われる事件が相次いでいるの。だから巫女である私が解決することになったんだけど・・・結局誰が犯人だったかわからなかったの」
「それってもしかしてハンターが言ってたドスナントカの仕業じゃないのか？」
「私もそう思うんだけど・・・それに」
「それに？」

何か不安そうな顔をする霊夢。
霖之助がどうしたんだいと聞くと言い辛そうに口を開いた。

「その時期と同じ位に博霊大結界に大きな歪みがあったの」

あまりの衝撃的な発言に二人は驚愕した。

「大きな歪みだって？！なんでそんな大事を早く言わなかったんだぜ！！」
「仕方ないでしょ！言えば幻想郷中が大騒ぎになることは目に見えてわかってんだから！！」
「二人とも落ち着いてくれないか、霊夢の言い分はわかるけど・・・それならあの“妖怪の賢者”が黙っていないんじゃないか？」

妖怪の賢者。
幻想郷には妖怪が住んでおり、その中でも一際大きな力を持った大妖怪がいる。
その中の一人である妖怪の賢者は幻想郷の管理者として君臨しており、幻想郷で起こる異変をいち早く博霊の巫女である霊夢に知らせたり、博霊大結界の管理などを手懸けている。

「今頃結界の修理をしていると思うけど・・・わからないわ」

小さく首を振る霊夢に魔理沙も少し不安そうな顔をする。

「なぁ、大丈夫なのかな・・・？」
「何、心配ないさ。すぐに元通りになるだろう」
「はぁ～いい風呂だった」

重苦しい空気に包まれた居間の襖を開いて体からまだ湯気が立ち昇っているハンターが入ってきた。

「うん？どうした三人共、辛気臭い顔して」
「いやなんでもないよ、さて風呂が開いたのなら僕も入ろうかな」

ハンターと入れ違う形で霖之助が風呂場に入っていった。

「？どうしたんだ霖之助の奴」
「ど、どうもしないぜ！それより今霊夢と宴会やってんだ、なぁ霊夢！？」
「ふぇ？え、ええそうね魔理沙！ハンターさんも一緒にどう？」

いきなり話を振られて慌てる霊夢に少し違和感を感じながらハンタ

ーは快く宴会の誘いを承諾した。
それから三人は香霖堂秘蔵の酒を次々と開けていって風呂から上がった霖之助に説教されたのだった。――――――――――――――――――――――――

QUEST．６　～束の間の休息？～（後書き）

蛇足

「ハンターさんってどれくらい呑めるの？」

「そうだなぁ・・・麦酒（ビールの事）は大ジョッキ１０杯位で焼酎は徳利１０本

位が限度かな？」

「・・・やっぱ人じゃなくて実は鬼の類じゃないのか？」

ハンターって実は酒豪揃いですよね、聞いた話では体が大きければアルコールに強いとか何とか。

このハンターの身長は自分設定で２００ｃｍ有るか無いかぐらいです。

（公式設定では平均１８０ｃｍらしいのですがモンスターと対比した時に私はどうもしっくりこないです）

この頃このハンターが羨ましくなってきました。

自分で書いているのに嫉妬するなんてなんか悔しいですね・・・

さて、いろいろ書き方等がコロコロ変わっていますがもし何か不具合な点がございましたらお知らせ下さい。

次は早く書き上がればいいな・・・ではまた次回サヨナラ。

ＱＵＥＳＴ．７　～狩人が見た夢～（前書き）

忘れ去られた頃にこっそりとＵＰします。河童の五色甲羅です。
前回、早めに上げれたらいいなとかほざいて置いて、一か月近い空きが開いてしまい申し訳ございませんでした。。。
いやぁ書くネタはあるんですが自分の頭では中々文章にすることが出来ずに頭を抱えておりまして・・・。ショウセツッテムツカシイネ
今回はちょっとしたネタみたいなものです。
さて前書きという名の愚痴はこれ位にして後書きにてお会いしましょう。

QUEST．7　～狩人が見た夢～

――――――――――――ボーン、ボーン、ボーン
香霖堂店内に置いてある柱時計が夜中の十二時を指した。
煌々と輝く月が真上から下界の隅々まで照らして何とも幻想的な光景が広がっていた。

「やれやれ、結局ほとんどの酒を呑まれてしまった」
霖之助はそう言って杯に注がれた酒を一気に煽った。

「だから悪かったってさっきから謝ってるだろ？」
隣に座っているハンターはそう言って開けられた霖之助の杯に酒を注ぐ。
あれからかなりの時間が経ち、霊夢と魔理沙はとっくの昔に酔い潰れて今は布団が敷かれた部屋で爆睡している。
見るからに成人していない少女が酔い潰れる様はハンターにとって異様な光景としかいえなかったが、幻想郷では未成年が飲酒をしたところで別に問題にはならないらしい。

「全く、秘蔵の酒だったのに・・・」
「だから悪かったって」

今現在ハンターは霖之助に誘われて居間を出て外の縁側で月を肴に静かに呑んでいるところだ。
時折吹いてくる優しい風が酒が入り火照った頬に当たって気持ちが良い。
騒がしい集会所の中で仲間達と談笑しながら呑む楽しさは無いが、

これはこれで風情が有りなんとも落ち着いた雰囲気で悪くないとハンターは思いながら酒が入った杯を傾ける。
少々度がきつい酒なのかのどがカッと熱くなる。

「それよりハンター、どうするんだい？」
「え？何が？」

いきなりの質問に質問で返してしまうハンター。
素っ頓狂な返答に霖之助は思わず溜息を付いた。

「何がって・・・さすがに何日も泊めることは出来ないよ。何か宛でもあるのかい？」
「あ～その事ね、そうだな・・・」

酒が入り回転が鈍くなった頭を捻って考える。
そしたらふと昼間の射命丸との会話を思い出した。

「そうだ人里にでも行こうと思っていたんだった」
「人里だって？」
「ああ、何でも今妙な襲撃事件が起きているって聞いたからな。もしかしたら夕方のあいつ等の可能性が強いと思ってな」
「なるほどね・・・」
「どうかしたか？」
「いや、何でもないよ」

なにか含みを感じる物言いに違和感を感じたが、ふいに眠気がハンターを襲ってきた。

「ふわぁぁぁ・・・」
「眠たそうだね、無理もない。そろそろお開きにしようかな？」

「そうするか・・・」

そう言って立ち上がり用意された部屋へ入ろうとする。
しかし霖之助はそのまま店内の方へと歩いていく。

「おや？まだ寝ないのか？」
「ああ、まだやることがあるからね」
「ふ～ん・・・じゃあお休み」
「お休み、よく眠ると良い」

そういって霖之助と別れ部屋に入る。
部屋の中央には一つの布団が敷かれてあった。

「これで寝ていいのかな？・・・あっ、そういえば魔理沙からなんか貰ってたっけ」

先の宴会時に魔理沙から渡された丸薬が入った小さな紙袋を取り出した。
それには胡蝶夢丸と書かれており、魔理沙が言うには数粒飲むと胡蝶になった自分を楽しむ夢が見られるらしいとの事。
どうやら魔理沙はどこか元気が無いハンターに気を使ってくれたらしい。だが、

「本当かなぁ・・・正直かなり嘘くさいんだが・・・」

そう言ってハンターは眉間に皺を作って渋い顔をする。

「・・・いや、好意を無下にするのは良くないよな・・・良し！」

そういって丸薬を数粒手に取り、一気に飲み込んだ。

「うぇ・・・かなり苦いんだなこれ・・・」

それからハンターは鎧を外してインナー姿になり、外した鎧を枕元に置いてイソイソと布団に潜り込んだ。
しかしハンターの身長に合っていなかったので足が布団からはみ出ている。
あまり使わない布団なのか少しだけ埃っぽいが泊まらしてもらっている身としてはそんな贅沢は言ってられない。

「はぁ・・・これから俺・・・どうなるんだろうな・・・」

暗い天井を見ながら一人呟く。
はぁ、と今日何回目かもわからない溜息が出る。
いろいろありすぎて頭の中がごちゃごちゃになっている感覚がなんとも気持ち悪い。

（無事に帰れるのかな・・・）

ふいに思った言葉が嫌に心に突き刺さる。

――――――――――――――――――――もしこのまま帰れなかったら？

（いやいやいや！なにネガティブになってんだ俺？！）

らしくないと布団を頭まで被る。

（今はもう「何も考えず寝よう・・・・・・）

そう思うと目を瞑ってジッとする。

やはり体は疲れていたらしく、すぐに睡魔が襲ってきた。
段々意識が遠くなっていき、ハンターはそのまま眠りに就いた。―
―――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――ハンターと別れてから霖之助は鑑定台に置かれたハンマーに手を触れる。
そこから読み取れるのはやはり、
――――――――名称：星砕きプロメテオル　用途：叩く――――――――
――――――――――――
ただそれだけだった。

「はぁ・・・やっぱり気のせいだったのか？」

いままで様々な道具をこの目で見てきたが、用途がここまで変わるものを見たのは初めてだった。
本来、道具とは同じ形をしたものでも使用方法によっては用途が変わってくるものである。
例えば二本の同じ筆があり、本来の用途が“かくこと”とする。
片方の筆でずっと絵を描いているとその筆の用途は“絵を描くこと”になる。
しかし、もう片方の筆で文章を書き続けるとその筆の用途は“文章

を書くこと”になる。
なぜこのような違いが生まれるのか。
答えは“筆自体がその用途を記憶する”のだ。
道具はどのようにして使われてきたかによって用途が変わっていくのだ。
しかしそれだけではやはり筆は筆、一体ここまで用途を変えるのは何の存在か。
答えは道具を使う“使用者”である。
絵を描く筆は絵描きがいなければ絵を描くことを記憶することができなかっただろう。
絵描きがいない絵を描く筆はただの筆に成り下がってしまうのだ。
それほどまでに使用者という存在は道具にとってかけがえのないものである。
話をハンマーに戻すと、本来の用途は叩くことだけであり、この用途は他の者が扱っても変わらないだろう。
しかしハンターが扱うと用途は一変して業火が噴き出し、圧倒的な破壊力で次々とモンスターをなぎ倒す強力な武器に変わった。
つまりこのハンマーは、使用者であるハンターが使用することによって初めて真の用途が発揮されるのだ。

「ふむ・・・こんな所か」

ハンマーを見ながら長考する霖之助、その頬は若干吊り上がっている。
多分、もう二度と来ないであろう機会にのんびり寝てはいられない。
霖之助は椅子に座り本格的にハンマーを調べ始めた。

「さて、と。まずは・・・」

この日の夜の香霖堂は朝まで明かりが付くことになりそうである。

――ある満月の晩、月明かりで照らされた何とも不思議な広場がハンターの目の前に広がっていた。

（あれ？・・・どうしてこんな所にいるんだ俺？・・・）

周りを山々が囲い、虫の声と思われる声が所々で鳴いている様はまさに幻想を見ているかのようである。

頭が回らず、ぼんやりとその光景を見る。

すると広場の真ん中に佇む人影が見えた。

（誰だろう・・・？）

その人影は後ろ姿で顔が確認できなかったが、何処かで見たような気がした。

いや、気がしただけでなく間違いなく知っているとハンターは確信した。

それもその筈、その人影は、

（・・・・・・俺・・・？）

月夜に似つかわしい奇怪なシルエットを持つ紅い防具を付けて佇む姿はハンター自身であった。
その証拠を徹底するものはその手に握られた月に照らされて銀色に輝くハンマーが・・・

（あれ？おかしいな・・・）

銀色に輝いている筈のハンマーが輝いていない。
むしろ銀色ですらない、“何か”がハンマーの表面に付着して輝きが失われている。
ハンターは目を凝らしてハンマーを見る。
どうやら赤い液体のようなものがハンマーの頭部を覆っている。
そしてハンターは付着しているのが何かを悟った。

（“血”だ・・・！）

頭部にべったりと付着した血がポタポタと零れ落ちる様は見ているだけで悪寒が走った。
と、次の瞬間赤いハンマーを持った紅いハンターがこちらに振り向いた。

（っ！！！）

ハンターはその顔を見て全身に鳥肌が立った。

（笑っている・・・！）

笑っていたのだ。
ただ笑っているだけじゃない、邪悪な狂気を纏った笑みでこちらを

見ている。
ハンマーと同じく返り血で真っ赤に染まった顔で。

「なんだ、まだ生きていたのか」

紅いハンターが呟くと周りの景色が一変した。
ハンターが山々だと思っていたものはモンスターの死体が積み重なってできたものに変わり、虫の鳴き声がまだ息のあるモンスターの呻き声に変わった。
ハンターの足元にも頭が潰れたモンスターの死体が転がっている。
その光景は地獄絵図としか言い様がないほどに禍々しかった。
ハンターは理性でなく、本能で今すぐにでもこの場所から逃げ出したいと思ったが、蛇に睨まれた蛙の様に一歩もその場から動けずにいた。

「そう怯えんなよ、すぐに楽にしてやるからな」

笑みを浮かべながら地面に転がった死体を当然の様に踏み潰しながら紅いハンターがこちらに歩いてきた。

（く・・・来るなっ！！）

大声で叫んだのだが紅いハンターには聞こえていないのか、その歩みを止めることは無かった。
そしてとうとうハンターの目の前に辿り着いた。

（何する気だ・・・？）

ハンターが困惑していると紅いハンターはおもむろにハンマーを振り上げた。

（？・・・！おいまさか！？やめろ！）『ガァァ・・・ハッ・・・』

声を張り上げたが喉が潰れているのか呻き声しか出ない。
その呻き声は辺りで聞こえるものと変わらない声だった。

「ぎゃあぎゃあうるせぇよ・・・最後くらい大人しく死ねや」

次の瞬間ハンターの頭上に赤いハンマーが振り下ろされた。
ハンターの目の前が真っ赤に染まり、自分が倒れていくのが随分と遅く感じた。
意識が遠のく最中、ハンターは血だまりに映った自分の姿を見える。
その身体は人間とは言い難い、鱗と甲殻で覆われた身体だった。―
―――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――「うをわああぁぁぁ！！！？？」

ハンターは叫びながら飛び起きた。

「はぁ・・・！はぁ・・・！はぁ・・・！」

肩で息をしながら周りを見渡す。
先程見た光景とは逆に、朝の日差しが窓から差し込み、どこからか鳥の鳴き声が聞こえてくる程に穏やかな朝を迎えた香霖堂の一室だった。
自分が寝ていた部屋であることを確認するとどっと安心感が溢れ出た。

（夢か・・・それにしても生々しい夢だったな・・・）

夢の事を思い出すとあの笑顔が脳裏にべったりとくっ付いて離れてくれない。
頭を振って忘れようとしていたら誰かが部屋の襖を開けた。

「おはようだぜハンター、絶叫するほど楽しい夢でも見れたか？」

朝一番の良い笑顔をした魔理沙が入ってきた。

「ああ、過去最高に最低な楽しい夢が見れたよ・・・」

そう言ってハンターは気怠げに魔理沙を睨んだ。

「はぁ？そんな筈無いぜ？だって私が渡したのは・・・あ」
「どうした？」
「ちょっと夕べ渡したの見せてくれ」
「これの事か？」

そう言って魔理沙に胡蝶夢丸と書かれた黒い丸薬が入った紙袋を手渡す。
すると魔理沙はやってしまったといわんばかりの顔をした。

「何だその顔？」
「いや・・・その・・・なんでもないぜ！朝飯出来てるからさっさと行こう、なぁ！」
「あ、ああ、わかった・・・」

魔理沙はゴミ箱に紙袋を捨ててハンターの腕を掴み、やや強引に部屋から連れ出した。
誰もいなくなった部屋のゴミ箱に入っている胡蝶夢丸と書かれた紙袋の裏側に非常に小さな文字で、
“悪夢タイプ（ナイトメア）”と書かれてあった。

QUEST．7　～狩人が見た夢～（後書き）

蛇足

「昨晩は随分うなされていた様だが大丈夫かい？」

「嫌な夢を見てね・・・、そういや悪夢なんて久々に見たな」

「悪夢ねぇ・・・ひょっとして昨日魔理沙が持ってきたキノコが原因なんじゃないの？」

「いや今回は軽い幻覚しか起こらない程度のキノコしか持って来てないぜ？」

「「「！？」」」

一度でいいからこの三人と香霖堂にお泊りしてみたいものです。

実際ハンターは本当に胡蝶夢丸の効果で悪夢を見たのでしょうか。

正直、もっと文章を書くことに慣れなければいけないなと思っています。

まぁ、こんな駄文元々誰も読んでな（ｒｙ

次回はようやく人里に向かわせることが出来そうです。

ではまた次回サヨナラ。

ＱＵＥＳＴ．８　～苦難の予兆～（前書き）

某極道ゲームに浮気をしておりました、河童の五色甲羅です。
東方茨歌仙　～　Ｗｉｌｄ　ａｎｄ　Ｈｏｒｎｅｄ　Ｈｅｒｍｉｔ
無事に発売されましたね。
延期にならないで本当に良かったですね、エエホントニ。
私はまだ手に入れていませんが読みたいなとは思っております。
モンスターハンターの方もこの夏いろいろイベントがあるようで今から楽しみです。
ではいつも通りに後書きにてお会いましょう。

QUEST．8　～苦難の予兆～

――――――――――「魔理沙、そこの醤油取ってくれ」
「ほらよハンター」
「ねぇ霖之助さん、ちょっと味噌汁薄いわよ」
「・・・つべこべ言わずに食べなさい」

ハンターは魔理沙に強引に連れ出された後、居間で霖之助と霊夢、それから魔理沙と一緒に朝食をとっている。
昨日の夕飯の残りにご飯、味噌汁とお新香が少々という至ってシンプルな献立であるが、昨日の夜に四人共結構な量の酒を呑んでいたのでこれ位で十分であった。

「そういや霊夢に魔理沙は昨日あれ程呑んでいたのに二日酔いしていないのか？」
「舐めて貰っちゃ困るぜ？幻想郷で呑むにはこれ位普通じゃないとな」
「鬼や天狗に比べたら潰れる位は序の口よ」
「そ、そーなのかー・・・」

その歳で潰れる程呑む事自体ハンターには考えられない事なのだが・・・所変われば何とやら。

「霖之助は大丈夫なのか？」
「僕は二人と違ってあんな風に酒は呑まないよ。浴びる様に呑むなんて、酒に対する冒涜としか思えないよ」
「あら、そんな言い方無いんじゃない？」
「そうだぞ香霖、人の酒の楽しみ方に口を出したらいけないんだぜ！」

「おっと、僕としたことが失言だったな。まぁ実際僕は一人で静かに呑む方が好きかな」
「へっ、陰気な奴だぜ」
「おや、酒の楽しみ方に口を出したらいけなかったんじゃないのかい魔理沙？」
「香霖だから良いんだぜ！」
「なんだいその理由は・・・」

呆れたようにため息を吐く霖之助。

「魔理沙らしくて良いんじゃないか？」
「そんな事より早く食べないと朝ごはん冷めちゃうわよ？」
「ああ、すぐに食べ終わらせるよ」

そう言ってハンターは残ったご飯に味噌汁を掛け、そして茶碗を傾け一気に啜った。が、

「ハンター、そんなにがっつくと「ゴフッ！！！・・・ゲホッ！ゲホッ！」あ～あ、言わんこっちゃない」

米粒が器官に入り、壮大にむせた。――――――――――――

――――――――――騒々しい朝食が終わり、食後のお茶を飲んでいるとハンターがおもむろに立ち上がった。

「どうしたハンター？」

一緒に茶を飲んでいた魔理沙が立ち上がったハンターを見る。

「いや防具を取ってこようと思っただけだ」

「そういやお前肌着だったな」

「どこぞの誰かさんが無理矢理引っ張って連れ出してくれたから防具を着る時間が無かったんだよ」

「一体誰なんだぜ？そんな事する奴は」

「さぁな、鏡にでも聞いたらわかるんじゃないか？」

そう言って居間を出て自身が寝ていた部屋に入る。

枕元に置いてあった防具を手に取り、足、腰、腕、胴体、頭と手慣れた手付きで装備していく。

現在ハンターが装備している防具は“ネブラUシリーズ”と呼ばれる一風変わったデザインが特徴的な防具でハンターのお気に入りである。

この防具、一見風変わりな服と見えなくもないが、実はそんじょ其処らで作られている防具とは比べ物にならないほど頑丈で尚且つ柔軟性に優れているという画期的な防具なのだ。

何処となく月夜に似つかわしい妖艶な雰囲気を醸し出すこの防具、時に周りのハンター達から異質な目で見られたりしたが、裸同然で凍土を走り回る奴や、ブルファンゴフェイクを被りランス担いで突進ばかりするような輩よりもマシだとハンターは思っている。

そんなことを思い浮かべながら着替え終えたハンターはアイテムポーチを腰に添え付け、着々と支度をしていく。

「うん？」

何気なしにゴミ箱の中の袋に目が止まった。

「・・・・・これも持っていくか、もしかしたら何かの役に立つかもな」

ハンターは袋を拾い上げアイテムポーチの中に仕舞い込んだ。
装備を整えて部屋を出ると店の方から三人の声が聞こえてきた。
ハンターが店の方に向かうと、魔理沙がハンターのハンマーを持ち上げようと躍起になっている姿が見えた。

「むぅ～・・・・・だぁ！！！やっぱ持ち上がらないぜ」
「なにやってんだ魔理沙」
「あっ、ハンター」

相当意気込んでいたのか、顔が赤くなっている魔理沙に声をかける。
すると横で見ていたのであろう霊夢と霖之助が呆れたように口を開いた。

「魔理沙がハンターさんみたいに豪快に振り回してみたいって・・・私はどうせ妖怪並の力じゃないと無理だって止めたんだけどね」
「確かに程の重量のものを振り回すなんて人間にはとても無理だね。鬼ぐらいならいけるんじゃないか？」
「・・・あんた等何気に俺を人外だと言ってねぇかそれ」

そういうとハンターは魔理沙の足元に転がっているハンマーの柄を掴み、

「よいしょっと」

軽々とハンマーを片手で持ち上げ、そのまま腰に回添え付けた。
何気なしに行われたこの行動に三人は「やはり人外か」と言わんばかりの視線をハンターに送った。

「どうかしたか？」
「「「いや、別に」」」

今のハンターの行動に突っ込んだら負けである。
そんな殺伐とした空気を何かが割れる音が引き裂いた。

パリリィィン！！

「グボァ！！！！」
「ハッ、ハンター？！」

いきなり窓ガラスが割れ、何かがハンターの顔面にクリーンヒットした。
ハンターが無様に床を転がっていると外から声が聞こえくる。

「号外、号外だよー。これを読まないと明日はないわー」

ガラスの割れた窓の下にガラスの破片と一緒に新聞がある・・・どうやら投げ込まれた新聞が偶々そこに突っ立っていたハンターの顔面に当たったらしい。
遠ざかっていく声に霖之助が深く溜息を付いた。

「はぁぁ、天狗は加減ってものを知らないのかい？全く・・・」

ぶつくさ言いながらも新聞を手に取り読み始める。

「ぬおおおぉぉ・・・」

「だっ、大丈夫かハンター・・・？」

「痛ってぇ・・・なぁ、今の声って射命丸じゃなかったか？」

顔面を手で覆いながら立ち上がるハンターの問いに霊夢はさも当然の様に、

「ハンターさんも取材されてたじゃない、天狗ってのはああやってあることないこと新聞に載せて幻想郷中にばら撒くのが仕事なのよ」

と一言。

「じゃあもしかして俺の事も書いているのか？」

「ああ、書いてあるね。『敵か？！味方か？！異世界からやってきた、その名はモンスターハンター！』か、なかなかいいんじゃないかな？」

「なんだそのネーミングセンス・・・」

「まあまあ・・・ん？」

「どうした香霖？・・・あ」

喰い付くように新聞の一部を読み始める霖之助の後ろに回り込んで新聞を読もうとする魔理沙。

するとなにか良くないことが書いてあったのか、魔理沙の顔が少し曇る。

「どうした、なんか気になる記事でもあったのか？」

「ハンターこの記事なんだが・・・」

「どれどれ・・・・っ！！」

霖之助が指さした所を読むとハンターは険しい顔になる。

『人里連続襲撃事件～犯人今だ特定せず～』
先月頃から話題になっている人里の近隣で起きている襲撃事件、人里の守護者の上白沢氏に取材を申し込んだところ今だ犯人は特定しておらず、今まで被害にあった里人は数十人にも及ぶと答えた。
被害にあった人々は口を揃えて見たこともない生物に襲われたと言っているようである。
今後このような事が起こらないためにも今現在人里は警備を強化し、夜には見回りをするほどの厳戒態勢になっているが、被害は後を絶たない。
このような襲撃事件の他にも奇怪なことがここ幻想郷のあちこちで起こっている。
効いたことも無い生物の鳴き声やや見たことも無い生き物を見たという報告が後を絶たない。
しかし現在状況では情報があまりにも少なくこれ以上の事はわからないとしか言い様がない。
詳しい情報が入り次第、文々。新聞号外にて伝えていくことにする。

「これって・・・」

霊夢もこの記事を読んでその顔に焦りが見える。

（ちっ・・・想像以上に被害は出ているみたいだな）

「こりゃさっさと人里やらに行った方がいいな」

「ちょっと待ってくれ」

「？」

霖之助は懐から一通の手紙を取り出しハンターに手渡した。

「これは・・・」

「人里は厳戒態勢に入っている、恐らく今は外から来た君は人里の中に入ることすら難しい」

「まぁ・・・そうだな」

「そこでその招待状を警備の者に見せるんだ、それなら快く向かい入れてくれるだろう」

「そうか、ありがとうな」

「お礼はいいから早く行きなさい」

「おっとそうだな」

ハンターはそう言って足早にドアへと向かっていく。

そしてドアの前まで来ると後ろの三人に振り向き、

「随分世話になったな、また来る時よ」

「ああ、またのご来店をお待ちしております」

似合わない敬語で送る霖之助の言葉に苦笑しながらハンターは店のドアを開けた。

外に出るとそこには雲一つない晴れやかな青空が広がっていた。

「すぅ・・・はぁ・・・良し！行くか！！」

朝の爽やかな空気で深呼吸を行い、ハンターは足に力を入れて地面を蹴り上げる。
青空の下、ハンターは人里に向かって猛然と走り出した。――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――「それじゃあ、私も神社に戻るわね」
「あー私も魔法の研究の最中だったな、じゃあ香霖またな」
「次来る時はツケを払ってくれよ」

ハンターが去った後、霊夢と魔理沙も香霖堂を後にした。
一人になった霖之助は本棚にある本でも読もうと立ち上がると、いきなり背後から声が聞こえてきた。

「良いお天気なのに店に籠って読書ですか？」
「！・・・・君か・・・・」

霖之助が振り向くと、そこには無数の目が覗く裂け目が音も無く現れた。
静寂の中唐突に響き渡った声の主に霖之助は苦い顔を浮かべる。
そんな顔をされたのに声の主は別に気にせずに話続ける。

「あら、客にそんな顔をするなんてひどい店ね」
「客はいきなり現れたりしないよ・・・」
（・・・今日は朝から不吉だな）

霖之助が頭の中で呟く。
すると声の主はさも嬉しそうに、

「今日は朝から不吉だと言わんばかりの表情をしていますわよ？」

まるで人の心を見透かしているような口調で話す。
霖之助が驚くと、それを見て声の主はクスクスと笑う。

「・・・勝手に人の心を見ないで頂きたい」
「あらごめんあそばせ。でも仮にも商人を名乗るのなら表情を読まれるのはどうかと思うわよ？」

人を小馬鹿にした言い方に霖之助は不機嫌になるが、声の主に対しては強く言い出せない。
何故なら声の主は、

「・・・それで、今日はどんな御用でしょうか“妖怪の賢者”様？」

幻想郷の管理者なのだから。

「ふふ・・・今日は別に買い物をしに来たわけじゃないのよ？」

裂け目が広がり中から一人の女性が現れた。
輝くような金色の長い髪に透き通るように白い肌を持つこの女性、
見れば万人が美人と言うであろう。

しかしこの人物は霖之助を遥かに超える年齢と知識を持つ妖怪。
人間の男が見たら一目惚れするほどの美人だが、妖怪からして見れば尊敬と畏怖の眼差しを送られる人物。

「この“八雲　紫”、今日は折り入って話があるのですよ」
「話・・・？」

どうせ碌でもない話が飛び出すと予期する霖之助、しかし実際飛び出した話はそれ以上に碌でもない話だった。――――――――――

QUEST．8　～苦難の予兆～（後書き）

蛇足

「まさか君から直々に話があるなんてね、何時もなら自分の式に頼むのに」

「ええ、実はちょっと前に喧嘩しちゃって・・・」

「喧嘩？珍しいな」

「だって外の世界のセーラー服を着ていたら「歳を考えてください」って言ってきたのよ？！流石の私も頭に来ちゃったわ！」

「・・・いや流石に無理があるだろう」

「ちくしょ（ｒｙ」

※この蛇足は本編に全く関係ありません。

冗談はさて置き、ようやくハンターが人里に向かうところまで行けました。

書いててわかったことは、

（あれ？ハンターここまで来てジャギィしか狩ってないんじゃ・・・＞（甲；）

ってことが分かったくらいですか。

・・・・・すまないハンター、俺が不甲斐無いばかりに見せ場が全く無い・・・

「本当だよ（怒）」

ではまた次回サヨナラ。

QUEST．9　～人里へ～（前書き）

この時期にクーラーが力尽きました。河童の五色甲羅です。
茨歌仙を手に入れて早速読んでみたのですが、霊夢に世話焼きしているところをみるとお母さんみたいですね華扇ちゃんって。
自分としては出してみたいのですが・・・かなり後々になりますね。
（てか出せるかどうかもわからん）
それではいつも通りに下でお会いしましょう。

QUEST．9　～人里へ～

――――――――――魔法の森にある香霖堂を出てからどれぐらい時が経っただろうか。
太陽は着実に真上へと進んでいくが、目的の人里は未だに見えてこない。

「はぁ・・・はぁ・・・結構な距離を走ってきたけど、まだ着かないのか」

ここまで走ってきたハンターは膝に手を当てて荒い深呼吸をする。
あぜ道が延々と目の前を走っているのを見てハンターはため息を付く。
ただ走っているだけでも辛いのに、ハンターはその上に武具を装備している。
傍から見たらわからないが相当な量の体力を消耗していた。
どこか一息付ける場所はと探していると、道の端に丁度腰を掛けるには良さげな岩が転がっていた。

（丁度良い、ここでちょっと休もう）

ハンターは岩にハンマーを立て掛けて岩の上に腰を下ろした。
今の幻想郷は気温が高く、全身に汗独特の不快感がハンターを襲う。

「あとどれぐらいあるんだろう・・・今日中にはたどり着きたいが・・・」

額に滲んだ汗を拭いながら呟く。
しかしすぐにまた額に汗が滲みだす。

「あーくそ！・・・あれ？」
余りの不快さに苛立ち気味に頭の上で燦々と輝く太陽を見上げる。
しかし突然ハンターの周りがまるで夜の様に暗くなっていく。
「なんだ・・・これ？」
ハンマーを手にして立ち上がる。
しかし周りを見渡してももはや手を伸ばした先すら見えない程に暗い闇が視界を覆っている。
正に一寸先は闇と言ったところか。
「（何も見えない・・・とにかく人里）え〝ぁ？！」
歩き出そうとした次の瞬間、得体の知れない頭痛が起こった。
ズシンと何かが乗っかったような重みとゴリゴリと固い何かで削られるような鋭い痛みにハンターは堪らず片膝を付く。
「うぅ・・・何なんだ一体・・・昨日魔理沙が持ってきたキノコの効果か・・・？！」
次に会う時にはドキドキノコでも食わしてやろうかと大人げない事を考えながら頭を触る。
しかし触れたのは自分の髪ではなく一回りほど小さい何かに触れた。
（何だこれ？何かの頭みたいだ・・・）
後頭部を触ると子供の胴体程の何かが首元にへばり付いている。
さらに額に触ると小さな手がガッチリとハンターの頭をホールドし

ている。
そして首を触ると足と思われるものが巻き付いていた。
どうやら頭痛ではなく、何者かがハンターの頭を抱え込むようにして噛み付いているようだ。

（なんだ魔理沙のせいじゃなかったのか、・・・ってそんなのんびり考えている場合かっ！）

痛みが先ほどより強くなり、頭から血が流れて、ハンターの顔を伝っていく。
痛みに耐えながらハンターは後頭部にある胴体に両手を回し、

「誰だか知らんが、いい加減俺の頭から離れろ！！

そのまま力任せに引っ剥がした。
すると周りの暗闇が晴れていき、また燦々と輝く太陽がハンターを照らし始めた。
視界が見えてくるとハンターの頭にへばり付いていた者が姿を現した。
ハンターの両手に抱えられていた者は、

「・・・・・・」
「捕まったー」

金色のショートヘアに先程の暗闇の様に黒いワンピースを着た小さな女の子だった。

「・・・えっーと・・・君は？」

頭から血を流しながら、ハンターは捕まったというのに嬉しそうに

笑う女の子に問い掛ける。

「私は“ルーミア”ってゆーんだよ！」

一層嬉しそうに笑うルーミアにハンターは混乱する。
そうなるのも無理はない、先程まで自分に噛み付いていたのが可愛らしい笑顔をこちらに向けているのだ。

「あなたはなんてゆーの？」

「え？あっ・・・」

聞き返してきたルーミアに戸惑いながらも自己紹介をする。

「俺はモンスターハンター、ハンターって呼ばれてる」

「変な名前～」

まるで子供の様に率直な感想を出してきた。
そうなると、益々この子が自分に対して行った行動が考えられない。
いきなり初対面の人の頭に齧り付くなんて狂人紛いなことを本当にこの子はしたのだろうか？
やはり魔理沙のキノコのせいなんじゃ無いのかと思えてくる。

「ねぇねぇ、ハンター！」

「うん？どうした？」

ハンターの両手の中で器用に両腕を左右に伸ばした妙なポーズを取りながらハンターの名前を呼ぶルーミア。
しかし、嬉しそうな口調とは裏腹にとんでもない言を言ってきた。

「あなたは食べてもいい人間？」

「・・・・・・・・・・・・は？」

口元に涎を垂らしながらハンターを見るその眼は冗談を言っているような眼ではなかった。
いろいろ言いたいことがあるが、取り敢えずハンターは今一番言いたいことを言った。

「いや、食べちゃダメだろ」
「そーなのかー」
（もしかしてこの子・・・）

あっけらかんと答えるルーミアにハンターは一つ疑問に思ったことを聞いた。

「ルーミア、君は人間じゃないのか？」
「そーだよー、妖怪だよー」

霊夢と魔理沙から聞いたこの世界に存在する人と対なす者。
ハンターが出会ったのは射命丸が初めてだったが、羽が生えていたから直ぐに人ではないとわかった。
しかしルーミアは知らない者が見たら普通の子供にしか見えない、現にハンターはルーミア自体が妖怪だと言ってくれなかったら普通の子供として接していただろう。

「つまり、俺の頭に噛り付いていたのって・・・」
「うん」
「はぁ・・・」

ルーミア曰く、そこに人がいたから襲ったということらしい。
はた迷惑な話だが、妖怪が人を襲うことは幻想郷でも珍しくないと

いう事なのであまり追及はしなかった。
ハンターはとりあえず喰われなかっただけ良しとした。すると、
グウゥゥ
「あ・・・」
「うん？今のは」
ルーミアのお腹が大きくなった。
左右に伸ばした手が力なくだらんと垂れ下がる。
「う～、お腹減ったよ～」
笑顔とは打って変わって今にも泣きそうな目でハンターを見る。
「わかったからそんな目で見ないでくれ！」（ほっとくとまた噛み付かれそうだ・・・）
耐え兼ねなくなったハンターはルーミアを座っていた岩に座らせると、アイテムポーチからこんがり肉を手渡した。
「俺の代わりと言っちゃなんだが、これで見逃してくれ」
「お肉だ～！！」
ルーミアは嬉々としてはんたーからこんがり肉を受け取ると直ぐに齧り付いた。
よほどお腹が減っていたのだろう、一心不乱に肉を貪る姿は何日も食べていないぐらいの勢いだった。
「まだあるからそんなに急がなくても良いぞ」

「わ～い！」

一時間後――――――――――

「ごちそう様～」

「・・・・・・お粗末様でした」

結局ルーミアはハンターが所持していたこんがり肉を殆ど平らげてしまった。

その証拠にルーミアが座っている岩の周りには骨が散乱している。

「まさかこんなに食うとはな・・・」

「お腹一杯～」

さも満足そうにするルーミアを見てハンターは小さくため息を付く。

あの小さな体の何処に肉は消えて行ったのか。

・・・考えるだけ無駄な事みたいなのでハンターは考えるのをやめた。

「しかし、そんなになるまで喰わなかったんだ？森に入れば何かしら食べ物があるだろう？」

ハンターの問い掛けにルーミアはしばし俯いてそのまま呟くように話始めた。

「この頃、森の中が変なの」

「変？」
「うん、この前も森の中で捕まえた人間を食べようとしたら変なのが現れて・・・」
「そのまま獲物を奪われた、と」
「その変なのは本当に変なの。弾幕で蹴散らそうとしても駄目だったの・・・・・・」

今にも消え去りそうな小声で呟くルーミア。
ワンピースの裾をギュッと握り締めているのはよほど悔しい思いをしたのだろう。
獲物を他者に横取りされるのはハンターでさえ辛く、時には泣き出したくもなる。
ルーミアの話を聞くあたり、変なのとはやはりモンスターのようである。
ハンターは昨日のジャギィ達に魔理沙の弾幕が全くの無意味だった事を思い出した。
いや、全くではなかったか。
魔理沙があの時使ったスペルカード、あれは有効だった筈である。

「スペルカード、だったっけ？それは使ってみたのか？」
「うん、小さな変なのは良かったけど、大きな変なのには・・・」
「そうか・・・」

どうやらスペルカードの有効範囲は小型のみらしく、中型、大型のモンスターには効果が薄いらしい。
決して無効という訳でも無いが、やはりごっこ遊びで生み出されたものではモンスターには敵わないのだろう。
あの時ドスジャギィが撤退したのは魔理沙に恐れをなした訳ではなく、一度に大量の味方がやられたのが原因だろう。
所謂、戦略的撤退というやつだ。

「・・・・・・」
「ハンター・・・どうしたの？」
ルーミアはいきなり黙り込んでしまったハンターの顔を心配そうに覗き込む。
「え？ああいや、何でもない」
そう言ってハンターはぎこちない笑顔を浮かべる。
すると安心したのかルーミアは元の嬉しそうな笑顔になってくれた。
しかしハンターはあまりのんびりしてはいられない、今日中には人里へ着かなければいけないのだ。
「さて、そろそろ・・・！」
「？」
ハンターはいきなり辺りを忙しなく見渡し始めた。
ハンターの行動に訳が分からないといった表情を浮かべるルーミア。
「ねぇどうしたの？」
「・・・ルーミア、今すぐにここから離れるんだ」
「え？」
ルーミアが聞き返した途端、
『ギャアアァァ！！』
「きゃあ！？」
「くそっ！」

何処からともなく一匹のジャギィがハンターとルーミア目掛けて飛び出してきた。
驚いて悲鳴を上げるルーミアに対してハンターは自分に飛び込んできたジャギィの頭をぶつかる寸前で掴み取り、

「おらぁ！！」

そのまま地面に叩き付けた。

『ギ・・・』

顔面を地面に叩き付けられたジャギィはそれでも顔を上げようとする。
しかしハンターは岩に立て掛けてあったハンマーを手に取り、

「寝てろっ！」

ジャギィの頭目掛けて振り下ろした。
グシャ、と頭蓋骨が潰れる音と共に地面に赤い花が咲いた。
ハンターはハンマーを構えて直ぐに臨戦態勢に入った。

「・・・」

一時の静寂が辺りを包む。
しかし、一向に襲ってくる気配は無かった。
どうやらこんがり肉の匂いを嗅ぎつけて一匹だけでノコノコやってきた若いジャギィだったようだ。

「怪我は無いか？」
「うん・・・」

「恐らく肉の匂いに釣られてやってきたんだろう、他にはもういないから大丈夫だ」

そう言ってハンターは空を見上げた。
太陽はとっくの昔に頂点を通り過ぎてゆっくりと西の地平線に近づいている。

「まずいな、今日中に人里に辿り着く予定だったんだが・・・」
「ハンター人里に行くの？」
「ああ、今からでも間に合うかどうか」
「ココから人里ならもう少し歩くと着くよ」
「そうか、ありがとうな」

そう言ってハンターはルーミアの頭を優しく撫でる。
するとルーミアはまた笑顔になってくれた。

「ううん、こちらこそありがとう・・・あといきなり噛み付いちゃってごめんなさい」
「いいんだもう、噛み付かれることには慣れているから」
「本当に？」
「職業上でね、じゃあまたな、ルーミア」
「うん！またねハンター！」

ルーミアはハンターに別れを告げると黒い球体になってフワフワと空へと飛んで行く。
その光景をハンターは手を振りながら見届けた。

「・・・さて」

だいぶ道草を喰ってしまった。

ハンターは遅れを取り戻すべく、再び人里に向かって足早に歩を進めた。――――――――――――――――――――――――――――あぜ道を歩き続けていると、小高い丘の様な所にやってきた。
そこから下の方を見ると何か門の様なものが見え、その門から中には建物が軒を連ねていた。

「あそこか、思ってた以上に広いんだな・・・」

あれからハンターは無事に人里まで辿り着くことが出来た。
丘の上から見ても人々の往来が見えるのはいかにこの人里が活気が溢れていることを証明していた。
ハンターは昔行ったことがある砂の街の賑わいに似た雰囲気に少しだけ懐かしさを感じた。

「“ロックラック”を思い出すなぁ、もし戻れたらまた行きたい・・・ん？」

里の中から目を逸らしてみると、そこには人里の自警団の者であろう、剣や槍を持った屈強な男達が人里の周りを警戒しながら見回っ

ている。
どうやら文々。新聞に記載されていた人里の襲撃事件は嘘ではなかったみたいである。

「だったらスグに中へ・・・」

そう言ってハンターが一歩踏み出した途端、

「そこの者、止まれ！」
「うおっ？！」

一人の自警団員に見つかった。
いきなり怒鳴られたものだからハンターは驚愕の声を上げた。

「どうしたっ？！」
「例の化物か！？」

それを機にすぐさま仲間の自警団員が次々とやって来て、ハンターは瞬く間に数十人に取り囲まれた。

（まずいな・・・ヘタに騒ぐと袋叩きにされそうだ）

ハンターはこの事態をどう対処すべきか悩んでいると一人の男がハンターの前にやって来た。
この男は自警団の団長だろうか、強面で腕っ節の強そうな男は物珍しそうにハンターを見ると事務的な口調で話し始めた。

「貴様、妖怪の類か？何の用かは知らんが、今人里はある事件によって厳戒態勢にある。貴様の様に怪しい奴は人里に入れることは出来ない。悪いが引き取ってくれ」

言い終わると団長は背中を向けて歩き出す。
すると周りを囲んでいた自警団員達も団長にに続いて歩き出す。
案の上、人里には入らせてくれないようだ。
ハンターは意を決して自分が何をしに来たのかを去っていこうとする自警団に向かって話始めた。

「待ってくれ、俺が来たのはその襲撃事件に関わる情報を人里の守護者とやらに伝えに来たんだ」

ハンターの言った言葉に自警団は立ち止まる。
ざわざわと何かを相談する仕草の後にまた団長が目の前にやって来る。

「どういうことだ？」
「そのままの意味だ」
「・・・証拠は？」
「ここに招待状がある」

そう言って懐から一通の手紙を取り出し、団長に渡した。
団長は、ハンターから見えないように後ろを向いて招待状を開き、中の文章を確認する。
確認し終えた後、納得いかないといった表情でハンターの方を向いた。

「・・・今回は特別に許可するが・・・」
（良し、サンキュー霖之助！）
「人里で少しでもおかしな行動をしたらすぐさま追い出すからな・・・！」
「き、肝に銘じておきます・・・」

威圧感漂う物言いに思わず敬語になってしまった。
よろしい、と団長は頷くと後ろにいた自警団員二人に招待状を渡すと命令を下した。

「おい、お前らでこのデカブツを上白沢殿の所まで案内しろ」
「「はい」」
「ちょっちょっと?！わかったわかったって！一人で歩けるから腕を離してくれ！」

ハンターは引きずられる様に連れて行かれた。
団長がその姿を黙って見ていると一人の若い自警団員が不安そうにしている事に気付いた。

「どうした?」
「団長、本当にいいんですか?あの背格好といい、腰に背負った妙なものといい・・・」
「・・・確かに外来人の者だろうが・・・なに妙な事をしたら追い出すまでだ。さぁお前らは持ち場に戻れ！！」
「「「「「「はい！」」」」」」

団長が声を張り上げると自営団員達は自分の持ち場に戻っていった。
一人になった団長はギュッと拳を握り締める。

「今日こそあの化物どもに一泡吹かせてやる・・・！」

そう言い捨てると自分の持ち場である門まで歩いて行った。――――――――

――――――――――――あれからハンターは何処か広場がある長屋のような場所に着いた。

「ここは？」

ハンターの問い掛けに自警団の二人はなんだ知らないのかと溜息をつく。

「ここは“寺子屋”、上白沢殿はここで子供達の先生をしていらっしゃる」

「ここで待ってろ」

二人の自警団はハンターを置いて寺子屋の中へと入って行った。しばらくしてから二人は出てきてハンターに告げた。

「もう少ししたら授業が終わる、それから話を聞いてくださるそうだ」

「俺達は持ち場に戻るが、くれぐれも無礼の無い様にな！」

「ああ、わかった。案内をしてくれてありがとうな」

「・・・ふん、団長の命令に従っただけだ」

お礼を言うと二人は元来た道を戻って行った。

ハンターは寺子屋の軒先に座り込み、その上白沢という人物を待つことにした。

「それにしても上白沢殿、ねぇ・・・」

あの屈強そうな自警団の団長が真っ先に自分をここに連れて来さしたということは、恐らくかなり腕が立つ人物であろう。

「相当筋骨隆々な奴なんだろうなー」

呑気にそんなことを考えていると、なにやら寺子屋の中から子供の声が聞こえてきた。
どうやら授業が終わったようだ。

「せんせぇー、さよならー！」

定番の言葉と共に子供達がわらわらと寺子屋の中から出てくる。
すると一人の男の子がハンターの姿を見ると大声を上げた。

「うわ！誰だお前！！」
「初対面で誰だは無いだろう・・・」
「さては事件の犯人だな？！この俺が退治してやる！！」
「うおっ！！」

話を聞かずにいきなり飛び掛かってきた男の子はハンターに殴る蹴るなどやりたい放題やってくる。
無論、ハンターにはそんな攻撃は効く訳が無い。
どうしたものかと頬を掻いていると、

「こらー！！」

寺子屋の中から一人の女性が飛び出してきた。

「やべっ先生だ！」

「先生の来客に対して挨拶もしないでなにやっているんだ！！」

「イッテェ！」

彼女は最初に飛びついてきた男の子に拳骨ではなく頭突きを繰り出した。

ゴツンと鈍い音が響き、余りの痛みに男の子はその場にうずくまる。

「まあまあ、別に気にしていないからその辺で・・・」

「しかし・・・」

見かねたハンターは間に割って入って彼女を宥める。

彼女は申し訳ないといった表情を見せる。

「子供は元気が一番だから・・・な！」

そういってハンターは男の子に手を伸ばす。

「ふん！先生が美人だからってかっこつけやがって！！」

しかし男の子は差し伸べられたその手を叩いて拒絶した。

「！・・・こら！！」

「へへーんだ！！じゃあな腰抜けの化物！！」

そう言うと男の子は颯爽と走って行った。

「すまない、根はいい子なんだ・・・」
「別に、元気があっていいんじゃないか」
若干心にクるものがあるが、子供のやることにいちいち口を出していては終わらない。
それよりも今はやることがある。
「俺はモンスターハンター、襲撃事件の事で上白沢という人物に会いたいんだが・・・」
丁度いいので彼女に人里の守護者であろう上白沢さんを呼んで貰おうとした。が、
「ああ」
その一言をいってハンターの前に立つだけである。
しばしの沈黙が二人の間を流れる。
「あの～・・・、上白沢さんはここにいるんですよね？」
「そうだが？」
確認してらやはりここにはいるらしいが、彼女は相変わらずそのままの姿勢で立っている。
「いや、だから上白沢さんを呼んで欲しいんだけど・・・」
話が進まないことに耐え兼ねたハンターは頭を掻きながらもう一度彼女に説明をする。が、
「私が上白沢だ」

「・・・・・・はい？」
「だから、私が“上白沢　慧音”だ」

ハンターは自分が思っていた人物像とは正反対の人物が上白沢と名乗っている。
筋骨隆々の男性どころか細身の女性であった。
頭に手を置いたまま固まるハンターに慧音はため息を付く。

「固まってないで話をしたいんだが？大丈夫かハンター」
「・・・ああ」
「立ち話もなんだ、とりあえず上がってくれ」

カルチャーショックを受けながらもハンターは寺子屋の中に入っていく慧音に着いて行った。――――――――――

QUEST．9　～人里へ～（後書き）

蛇足

「あーあつまんないな～父ちゃんは自警団で忙しいし、里の外にも出られないし・・・そうだ！俺が犯人を捕まえたら父ちゃんも喜ぶし、先生だって俺の事を見直すかも知れない！！そうと決まれば・・・」

子供って行くなと行ったところに行って、やるなってことを平気でしますよね。

それはわざとやっているんじゃなくて好奇心が高いからこそやっているからタチが悪い。

まぁそれが子供という生き物なんですけどね。

そんな事より十話にしてようやく人里に着くとか・・・自分で書いていて遅すぎるとしか言い様がありません・・・。

もっとすらすら打ち込めるようになりたいです。

あとこの小説、原作を“モンスターハンター”に合わせているんですが、もしかしたら“東方”に合した方がいいのでしょうか？

まぁこれ読んでる時点で両方知っていなきゃ意味不明なんですけどね。

それではまた次回サヨナラ。

ＱＵＥＳＴ．１０　～狗竜の長を狩猟せよ！～（前書き）

忘れられた頃にこんにちわ、河童の五色甲羅です。
最後の投稿から気が付いたら二ヶ月近く空いてしまいました・・・。
いやぁ、中々書くことが纏らないのは歯痒いですね。
あとお気に入りの登録の方が十件越えしているのに何気にビビってます。
登録して下さった方々、ありがとうございます！
ではまた下でお会いしましょう。

QUEST．10　～狗竜の長を狩猟せよ！～

――――――――――あれからハンターは寺子屋の一室に通され、そこで慧音と話を進めていた。

「・・・という訳だ」

「なるほど・・・つまりこの事件はそのジャギィとボスのドスジャギィとやらが犯人だということだな？」

「あくまで憶測だけどな、実際に見てみなきゃわからん」

はぁ、とハンターは溜息を付いた。

思えばこの幻想郷に来てからかなりの頻度で溜息を付いている。

だが、慧音から被害の話を聞く所では嫌でも付いてしまうものである。

「作物に家畜に魚・・・幾らなんでも無差別すぎるだろ」

「それでもほんの一部だ、唯一良いと言えるところはまだ死者は出ていないところだな」

「まだ、なんだろ？」

「ああ、こちらとしてはこれ以上被害に遭う前に解決したいところだが・・・」

「どうした？」

ハンターが急に黙り込んだ慧音に目をやると、慧音は困り果てた表情をしながら招待状を取り出した。

「この招待状にも書いてある通り、私の弾幕が通用しなかった。そこで博霊の巫女に事態の収拾を頼んだのだが・・・」

「無理だった、と」

「その時は自警団総出で追い払えたんだがな」
言い終わると慧音の顔が陰った。
ハンターにとってはジャギィなど取るに足らない相手だが、それはあくまでハンターは過酷な訓練を乗り越えてきたからであり、一般的な成人男性じゃ数匹に囲まれただけでも命取りになる。
二人の間に重苦しい空気が流れ始める。が、
「だけど、もう大丈夫だ」
「え？」
暗い表情をする慧音にハンターは力強く言い放った。
「俺はそいつらを狩る事を生業としているからな、今度襲ってきたら返り討ちにしてやるさ」
「・・・そうか、頼もしい限りだ」
先程の空気とは一変して和やかな空気が辺りを包む。
すると慧音はそうだと言って手を叩いた。
「ハンター、今来たばかりで里の中を見ていないんだろう？」
「ああ、有無を言わさずここに連れて来られたからな」
「だったらこれから里の中をパトロールする予定だからついてくるか？」
「そうだなぁ・・・」
この慧音の提案にハンターは考え込む。
ここは人里、もしかしたら何か元の世界に帰る方法が見つかるかもしれない。
それ以外にもなにかしらお世話になるかもしれないのでハンターは

この提案を呑むことにした。

「良し！それじゃあ早速行くことにしよう」

慧音は意気揚々とハンターを連れて外に出る。

「で、どこに行くんだ？」

「ん～そうだな・・・まずは大通りの方まで出てみるか」

慧音はすたすたと歩いていく。

ハンターは慧音の右斜め後ろに着いて歩く。

時折里の人に声をかけられると慧音は立ち止まり軽い挨拶をしていく。

「・・・なぁ、慧音」

「なんだ？」

「これがパトロールか？ただの挨拶周りにしか見えないんだが」

ハンターから見ればパトロールというより只の散歩にしか見えない。

ハンターの発言が気に入らないのか慧音は膨れっ面になる。

「これもれっきとした私の仕事だ！それにこうやって挨拶をすることによってだな、人と人との繋がりがより太くなり結果として云々」

・・・」

説教じみた口調にハンターの脳裏に口うるさかった教官の顔が浮かんだ。

（そういえば上位クラスになってから顔を出してなかったな・・・

元気にしているだろうか・・・）

「聞いているのかハンター?!」
「え?ああ、すまんほかの事考えていた」
「仕方ないじゃあもう一回初めから・・・」
「いやいいって、ほらまだ周る所はあるんだろう?」
「あ!こら!」

若干不満そうな慧音を置いてハンターはそそくさと歩き出した。
すると曲がり角で見えなかったのかハンターはいきなり飛び出してきた子とぶつかってしまった。

「わっ!」
「おっと!」

その子は綺麗な緑色のショートヘアに黒いマントの様なものを羽織った子だった。
極めつけに頭から虫を連想させる触覚のようなものが生えているのでこの子が人ではないことは直ぐにわかった。

「いたたた・・・」
「すまない、大丈夫か?」

ハンターは尻餅をついているその子に手を差し伸べる。
するとハンターの手を借りて立ち上がると頭を何度も下げて謝罪してきた。

「す、すみません!こちらこそ急いでいたので気が付かなくて・・・」

ぺこぺこと頭を下げる子にハンターは別に気にしない表情で答えた。

「そんなに謝らなくていいさ、それより怪我とかしてないか？」
「は、はい！あ、でも・・・」
「でも？」
「ハチミツが・・・」

その子が持っていたのであろう壺の中からハチミツがこぼれ出していた。

「どうしよう・・・」

途端に今にも泣きそうな表情を浮かべるとそのまま塞ぎ込んでしまった。

（まずい泣かせてしまったか・・・仕方がない）

見かねたハンターはアイテムポーチから瓶入りのハチミツを取り出して壺の中に注ぎ始めた。
見る見るうちに壺の中はハチミツでいっぱいになりハンターは女の子の前にハチミツでいっぱいになった壺を差し出した。

「え？」

驚きを隠せない顔でハチミツが入った壺とハンターの顔を交互に見る。

「悪かったな、俺が持っていたハチミツで良かったらこれで許してくれないか？」

今壺の中に入っているのが違うことに気付いたのか恐る恐るハチミツを指ですくって味見をした。

すると見る見るうちに顔が綻んでいく。

「おいしい・・・」

「それは良かった」

「これならあの人も満足してくれる筈！ありがとうございます！」

その子は立ち上がると元気良くハンターにお礼をいった。

「いや俺もぶつかったんだからお礼はいらないさ」

「あっ私は“リグル・ナイトバグ”って言います」

「俺はモンスターハンター、ハンターって呼ばれている・・・それより急いでいるんじゃなかったのか？」

「あわわそうでした！すいませんこのご恩は次の機会に、さよなら～！」

早口で言い終わると壺を大事そうに抱えてリグルは駆けて行った。

「なんだ、ハンターというからには野蛮な奴かと思ったら、案外優しいんだな」

どこに行っていたのかいきなり後ろに現れた慧音は何故か嬉しそうにしている。

何がおかしいのかわからないハンターはブスッとした表情をする。

「なんだ？俺みたいなのが子供に優しくするのは似合わないってか？」

「いや別に悪い事じゃない。見ていたら微笑ましくてな、ついつい笑ってしまった」

「まぁ別にいいだけどな・・・」

慧音の発言に淡々と答えるとハンターは早足で歩き出した。
「あ、こら置いていくな！」
慧音はハンターに遅れまいと走り出す。すると、
――――――――カン！カン！カン！カン！
「一体なんだ？！」
「この音は・・・！」
けたたましい鐘の音が辺りに鳴り響く。
すると一人の若い自警団員が血相を変えて走り寄って来た。
「上白沢殿！！たったたったっ大変です！！」
「一体どうした？緊急用の警鐘を鳴らすなんて・・・」
「奴らです！奴ら寄って集って門を攻撃しています！」
「なんだって！？」
肩で息をしながらハンターが通ってきた門の方向を指差す自警団員の言葉にハンターと慧音は驚愕する。
しかしここで突っ立っている訳にもいかない。
「・・・っハンター！」
「ああ！」
「え？ちょ・・・ちょっとお二方？」
「お前は里の皆の安否を確認してきてくれ！門の方は私とハンターに任せろ！」
「は、はい！！」

素早く自警団員に命令すると慧音とハンターは門の方へと走っていく。

「くそっ！どうなってんだ！里を襲うなんて・・・」

ハンターが走りながら悪態を付くと横を走る慧音は疑問を浮かべる。

「襲う？奴らは里を襲うんじゃないのか？」

「いや逆だ、普段は人里みたいな集落を直接襲うなんてことは稀なんだ。リスクの方が高いからな」

「じゃあなぜ・・・」

「持論だが、奴らも知らない土地に迷い込んで気が動転しているんだろう。だから普段じゃありえない行動をしているんだと思う」

「なるほど、じゃあ何をしでかすかわからないな」

「ああ、非常に危険な状態だ・・・！見えたぞ！！」

会話をしながらしばらく走るとやがて門が見えてきた。

しかしハンターが入ってきた時には開いていた門は今は固く閉ざされている。

その門の前には二人の自警団が声を張り上げて里人を寄せてけないようにしていた。

「あ！上白沢殿・・・とさっきの外来人！上白沢殿はともかくなんでお前まで・・・」

「事情によりこの一件に協力してくれるそうだ」

「協力？馬鹿言うな！相手は未知の化物だぞ？！」

「御託はいいからさっさと門を開けろ！手遅れになる前に！！」

ハンターが痺れを切らして怒鳴ると二人は顔を見合わせた。

やがて門に架かる錠を外し始めた。

「今外では団長と数人が応戦しています！敵の数は二十前後と予想！」
「二十か、結構な数だな」

ハンターは背中に背負ったハンマーを握り締める。
慧音もそれに合わせて構えに入る。
やがて錠が外されると門がゆっくりと開いてく。

「開けたぞ！」
「門は直ぐに閉めるから後戻りはできないぞ！」
「望むところ、行くぞ！」
「ああ！」

門が開き切る前に二人は外に飛び出した。
そしてハンターと慧音の目に飛び込んできたのはジャギィの群れに応戦している自警団達だった。

『ギャアァ！！』
「くっ・・・この野郎！」
『ギュアアァ！』
「うわああ！こっこっちにくるな化物！」
「怯んでる場合か！門へ近づけるな！！」

見ているだけでは自警団の方が劣勢のようでじわじわと後退している。
このままでは門を突破されてしまうだろう。

『ギャアッ！』
「た・・・助け・・・！」

「ふんっ！！」ガツンッ！！
『ガッ・・・』

ハンターは近場で自警団員を襲っていたジャギィをハンマーの一発で仕留める。

「あ・・・あんたは」
「団長は何処だ？！」
「だ・・・団長ならあそこに・・・」

自警団員が指差した先にはジャギィ数十匹をたった一人で相手をしている団長の姿が見えた。

「あのままでは危ないっ！」
「行こう慧音！」

二人は団長の元に走り出す。
途中で二人の存在に気付いたジャギィが束になって襲い掛かってきた。

『ギャアアァ！』
『ガアアッ！』
「邪魔だぁ！！」
「・・・なんて火力の武器だ・・・」

しかしハンターは近づいて来るジャギィ達をハンマーで次々と葬り去っていく。
慧音は自分達が死ぬ物狂いで追い返すのがやっとだったジャギィ達をまるで赤子の手をひねるように捌いていくハンターの怒涛の快進撃に慧音は頼もしさとほんの少しの恐怖を感じた。

しかしそんなハンターの働きがあってか、すぐに団長の元までたどり着くことが出来た。

「団長殿！」
「！先生・・・とお前は？！」
「加勢する、それより大丈夫か？」
「あ、ああ。何とか俺らだけでなんとかしたかったんだがな・・・」
「流石にこの数は私達では無理だ。ハンター、出来るか？」
「ああ、少し下がっていてくれ」

ハンターはそういうとジャギィの群れに対峙するとハンマーを構えて立ち止まる。
新たに登場したものにジャギィ達は一層声を荒げ、動かないハンターに向かって飛び掛かる。

「ハンター危ない！」
「・・・」

このままでは危険と判断した慧音は懐からスペルカードを取り出すが間に合わない。
ジャギィ達の牙がハンターに襲い掛かる。が、

「吹っ飛びな！！」

ハンターは構えたハンマーを思いっきり振り被り、そのまま地面に打ち付ける。
ズドン、と大きな音を立てて打ち付けられたハンマーは地面を揺るがすほどの衝撃と灼熱の炎を持って飛び掛かってきたジャギィ達を一掃した。

「す、すげぇ・・・」
「あの数を一撃とは・・・」
その光景を見ていた団長と慧音はその破壊力に感嘆するばかりである。
「ふぅ・・・さて、まだやるか？」
ハンターは地面にめり込んだハンマーを持ち上げ残りのジャギィ達を睨む。
ハンマーが叩いた地面はまるで爆弾でも落ちたかというほどに地面がえぐれ、焼きただれていた。
その威力にジャギィ達は思わずたじろぐ。その時、
――――――――――クオオォォォォォ・・・
「？なんだこの鳴き声は」
「この鳴き声は・・・まさか！」
ハンターが気付く頃にはその声に導かれるようにジャギィ達は一斉に森へと撤退を始めていた。
「くそ！今度は逃がさねぇ！！」
「あっハンター！！」
逃がすまいとハンターは直ぐにハンマーを担ぎ直し、ジャギィ達を追っていく。
慧音は引き止めようとしたが、すでに走り去ったハンターの耳にその声は届かなかった。

「先生！追わなくてもいいんですかい？！」
「・・・いや私達が行ったところで邪魔になるだけかもしれん、それより里人の安否を・・・」
「かっ上白沢殿！大変です！！」
慧音が振り返った瞬間、あの時の自警団員がまた血相を変えて走り寄って来た。
「どうした！次は何だ！」
「はい！あのですね、もう何がなんやら自分もわからずでもう・・・」
「ええいシャキッとせんか！」
「はいぃ！」
困惑した様子に見かねた団長は喝を唱えると自警団員は背筋を伸ばして事を告げた。
「この状況で一人の行方不明者が出ているんです！！」
「なんだって？！」
「一体誰の行方がわからないんだ？」
「それが・・・その・・・まことに言いにくいんですが・・・」
「どうした、早く言え！」
「はい・・・わかりました」
何か言い難いような素振りをする自警団員の口からとんでもない事が告げられた。
「行方不明者は・・・団長、あなたの息子さんです・・・！」――――――――――――――――

――――――――――――――時は少しだけ遡り、ここは人里の門から少し離れた場所である。

「ちぇ、見張りが多くて出られやしねぇ」

一人の少年がとぼとぼと元気がない歩き方で大通りから外れた脇道を歩いている。
その少年の手には小刀と人を縛るのに丁度良い長さの縄が握られている。

「ここで俺が里を荒らす犯人とやらをとっちめたら父ちゃん喜ぶだろうなぁ、それに慧音先生だって俺の事を見直すかも知れないし」

そう呟くと少年は声を殺しながら笑う。
どうやらこの少年は里を荒らす犯人を自分だけで捕まえて大人達に認めてもらおうとしているらしい。
そして門まできたものの、門番に捕まりおとなしく家に帰りなさいとまで言われてしまった。

「う～んやっぱりこっそり出るのが得策かな・・・」

少年が脇道を歩いていくとやがて木で出来た高い塀が見えてきた。

この塀は今現在人里で起こっている襲撃事件の為に作られた塀である。
一見子供が乗り越えれる様な塀ではないが、よく見ると急ぎで作ったこの塀は所々に小さな隙間が空いている。
少年はその隙間に手足を入れすいすいと塀を登り始めた。
普段からこのような事をしているのか、数分の間に少年は塀を乗り越え、里の外へと出てしまった。

「ふん、こんくらいの塀じゃ先生の授業から抜け出す方がよっぽど難しいや」
「・・・?!・・・・・・・!」
「・・・・・!・・・・!」
「ん?なんか騒々しいな」

なにやら門の方から自警団の者と思われる叫び声が聞こえてくる。
犯人でも現れたのかと思い、少年は門へと向かった。
そして犯人が自分の想像していたものとは格段に違うことを目の当りにすることになった。

「な・・・何だあいつら・・・?」

トカゲの様な姿をした怪物が群れをなして自警団を襲撃していたのである。
それに自警団側は攻めるどころか防戦一方を強いられている様な戦況であった。

「あんなのが犯人だなんて聞いてねぇよ!!とっとにかく里の中へ・・・」

出る幕ではないと思った少年は見つかる前に早く塀を登って里の中

に戻ろうとした。
が、遅かった。

ズサッ・・・
「っ！！？」
『グルルル・・・』

いつの間にか目の前に体長数メートルはあろうかという巨大な怪物が佇んでいた。
かく言うこいつこそがジャギィ達を率いて里を襲っていた張本人のドスジャギィである。
しかし少年はそんな事を知るわけでもなく、

「う、うわあああぁぁぁ！！！」

大きな声で叫びながら少年は里とは違う森へと入って行ってしまった。
しかしドスジャギィは目の前に転がっていた若くて新鮮な肉を逃がす訳が無い。

『クオオォォォォン』

ドスジャギィは一鳴きすると集まってきたジャギィ達と共に少年を追って森の中へと入っていった。

「くそっ、追いかけてきやがった！」

森に入って攪乱させようとしたが、足の速さはあちらの方が早い。
すぐに少年の姿をとらえたドスジャギィは一直線に向かって来ていた。

「どうしたら・・・！そうだっ！！」

少年は手頃な大きさの木に飛付くと、すいすいと登り始めた。

『グウウゥゥ・・・』

流石のドスジャギィでも木に登ることは出来ないのか、少年が登った木の周りをじれったそうにまわり始めた。
ひとまず安全な場所を確保したが、下のドスジャギィとジャギィ達はあきらめる気配が無い。

「う～ん・・・何か手は・・・」

少年が腕を組んで考えていると、ジャギィ達の後ろから見知った声が聞こえてきた。

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・・ようやく追いついた・・・」

『！』

「あ！お前は！！」――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――声の主はジャギィ達を追って森に入ってきたハンターであった。

「ん？・・・！！君はさっきの子か！？こんなところでなにやってんだ！！」

少年の声で気付いたのかハンターは木の上を見上げて声を張り上げる。

「そんなことはいいから早く助けてくれよ！」

「言わずもがな、もうちょっとそこで待っててくれ！」

『クオオオォォォォン！！』

ドスジャギィの命令でジャギィ達はハンターに標的を変えると一斉に飛び掛かってきた。

ハンターは素早くハンマーで飛び掛かってきたジャギィを次々に吹き飛ばしていく。

「そっちが数で勝負するならこっちは火力で勝負だ！！」

文字通りの高火力でジャギィの数はドンドン減っていく。

そしてついにこの場で息をしているのはハンターと少年とドスジャギィだけとなった。

ハンターが改めてドスジャギィを見る。

ドスジャギィの右足には大きな火傷が生々しく残っている。

「やっぱり昨日香霖堂を襲った奴か、今回は仲間を先に倒したから同じ戦法は使えないぞ？」

『グウウウ・・・ガアアアァァァ！！』

「！危ない！！」
「うおおっと！」
怒りに燃えたドスジャギィの巨体がハンターに飛び掛かってきた。
ハンターはなんとか直撃を免れる。
「お返しだ！！」
ハンターは無防備になったドスジャギィの横腹に思い切りハンマーを打ち付けた。
『！！ガッ・・・カッ・・・！！』
苦しそうにドスジャギィの口から空気が漏れる。
ハンターはその隙を逃さず追撃を加えていく。
「そらそらそら！」
胴体、腕、首と次々にドスジャギィの体にはいくつもの打撲傷と重度の火傷が刻まれていく。
『クオオォォ・・・』
深手を負ったドスジャギィは堪らずにハンターに背を向き、足を引きずりながらさらに森の奥へと消え去ろうとした。
「また逃げる気かっ！！」
「させねぇ！」
逃がすまいと少年は懐から小刀を取り出すと、ドスジャギィに向け

て投げた。

「狙うは・・・そこだっ！」

『！！ギャアァ！』

見事に少年が投げた小刀はドスジャギィの右足にある火傷に突き刺さった。

流石のドスジャギィも傷を貫く痛さに耐え兼ねずに足を止める。

「今だ！！」

『！』

ハンターは素早くドスジャギィの前方に躍り出るとハンマーを振り被り、

「おらぁ！！」

『ガアアァァ！！』

渾身の力でドスジャギィの脳天に振り下ろした。

――――――――――――――――――――グシャ

頭が潰れる音が聞こえると、ドスジャギィの体はそのまま地面に倒れ伏した。

ハンターはドスジャギィが物言わぬ事を確認すると大きく息を吐いて緊張を解いた。

「はぁ・・・狩猟完了」

「やったのか？」

少年は自力で木から降りるとハンターの横に立ち、ドスジャギィを見て顔を歪ませた。

「うわ・・・えげつねぇ事するな・・・」
「何言うか、こうしなきゃ自分がこうなってなんだぞ？」
「そうだけど・・・ん？ってお前真っ赤じゃねぇか？！」
「ん？・・・あ、本当だ。まぁ安心しろ全部返り血だ」

元々赤い色の防具であるが、今のハンターはドスジャギィの血でさらに赤くなっていた。
傍から見たらもう立派な妖怪である。

「お前本当に化物だな」
「失礼だな、これでも人間だぞ？え～っと・・・」
「太一だ」
「え？」
「名前言ってなかっただろ？だから俺の名前は太一だ」
「・・・そうか太一、俺はモンスターハンターだ」

そういって二人は握手をする。
握手を交わした後、ハンターは太一に疑問に思っていたことを言った。

「でも、どうしてこいつらに襲われていたんだ？」
「うっ・・・それは」
「お～い、ハンター！！」
「「！」」

太一が答える前に森の茂みから見慣れた人物が現れた。

「っ！太一！！無事だったんだな！！」
「先生・・・て、おわ！！」
茂みから現れた人物、上白沢慧音は太一の姿を確認するや否や思いっきり抱き締めた。
「心配したんだぞ？あいつ等に連れ攫われたかと思ったぞ？」
「先生・・・ごめんなさい・・・」
目元に光るものを見た太一は素直に謝る。
そして恐怖から解放されて安心したのかいつの間にか眠ってしまった。
慧音はハンターに目をやると何度も感謝の言葉を投げかけた。
「ありがとうハンター、お前が助けてくれたんだろう？本当にありがとう」
「まぁな、でも太一のアシストが無かったら逃げられていたかもな」
そういってハンターはドスジャギィに目をやる。
「こいつが・・・あの群れのボスか」
「里を荒らしていたのは九分九厘こいつで間違いないだろう」
「ああ・・・目撃証言もあったからこいつで間違いない」
「じゃあこれで里も安心だな」
「ああ、じきに夜になる。夜になるとここも何かしら危険だから里へ戻ることにしよう」
慧音は太一を背負う。
それに対してハンターはドスジャギィを背負った。

「さて行くか」
「いやちょっと待て、まさか持って帰る気か？」
「当り前だろう？せっかく命懸けて狩った獲物をハンターである俺がほっとく訳無いじゃないか」
「はぁ・・・好きにしてくれ」

呆れた様に慧音はため息を吐くと里へと歩き出した。

「あ、後慧音」
「何だ？」

慧音は振り返ると何やら神妙な顔をしたハンターが迫ってくる。

「ど、どうしたいきなり・・・」

近くまで来たハンターに少し硬くなる慧音に対し、ハンターは、

「後で風呂貸してくれないか？」

と一言。
無論、慧音はその一言にため息を付くしかなかった。

QUEST．10　～狗竜の長を狩猟せよ！～（後書き）

ひっさびさの蛇足
「ねぇリグル」
「はい何でしょう？」
「この蜂蜜は何の花のものかしら？中々美味しいわよ」
「え～と・・・わかりません」
「わからない？」
「はい、その蜂蜜は赤いへんてこな服を着て腰の辺りに銀色に輝く槌みたいなものを背負っていて身長が二m位あるハンターって人がくれたんです」
「・・・新手の妖怪か何かかしら？まぁいいわ、それよりこの頃持ってくる蜂蜜の量が少なかったけど何かあったの？」
「はい・・・実はこの頃蜂の巣が破壊されて中の蜂蜜を全部持っていかれる事件が続いてるんです・・・」

一気に書き上げたので色々とおかしい点がありますがその辺はスルーしてくださいｏｒｚ
ではまた次回お会いしましょうサヨナラ。

次はいつになるだろうか・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3336s/

東方狩猟奇譚

2011年10月8日23時22分発行